人と自然がともに呼吸しあえる総合的な環境づくり

Nelsis ネルシス

自然浴環境デザイン

Vol. 6

特集

21世紀のランドスケープ・エコロジー

みなとを生かすまちづくり

プローラの海岸にある巨大リゾート跡

❖

バルト海に面したドイツ最大の島であるリューゲン島は、古くから北欧を結ぶ海港であった。
白亜石の断崖が切り立つシュトゥーベンカマーは美しい稜線を魅せる。
19世紀にドイツ・ロマン派の巨匠C・D・フリードリッヒが訪れ『リューゲン島の白亜石』を描いた。
しかし20世紀になるとプローラの海岸にナチスが全長5km、2万人を収容する巨大海洋リゾートの建設を始めた。
戦争で工事は中断され、戦後は東ドイツによる軍事施設となり、ベルリンの壁崩壊後は軍事博物館などに利用される数奇な運命をたどる。
海と島は、A・ベックリンの『死の島』のように神秘主義やロマン主義の幻影を招来させる。
それが負のエネルギーに引き寄せられると、恐ろしい廃園の光景となる。現在は旧東地区の閑静な避暑地としての落ち着きを取り戻し、
海岸にはたくさんの老夫婦が穏やかな長い休暇を過ごしている。

文・写真……**シヲバラ タク**

人と自然がともに呼吸しあえる総合的な環境づくり

Nelsis ネルシス

自然浴環境デザイン

Nature（自然力）＋ Element（要素）＋ Oasis（やすらぎ空間）

［表紙写真］バルト海に面したリューゲン島の断崖（ドイツ）
撮影：シヲバラ タク

C O N T E N T S

Vol.6
2005-2006

02 ［特集］みなとを生かすまちづくり 21世紀のランドスケープ・エコロジー

03 ウォーターフロント開発の経緯とこれからのまちづくり……❖ 横内憲久
07 日本における「みなとまちづくり」の取り組み
08 ［CASE 01］門司港レトロ事業（北九州市門司区）
14 ［CASE 02］長崎港の水辺再生（長崎市）
20 ［CASE 03］蔵のまち河崎のまちづくり（伊勢市河崎）
26 護岸の風景（青森ベイ・プロムナード／鹿児島本港の歴史的防波堤／アーティストがつくる護岸の風景：中国 YiWi South Riverbank）

30 港湾・海岸に求められる防災対策……❖ 国土交通省港湾局海岸・防災課

32 がんばる自治体のまちづくり奮闘記 ❸

長野県高井郡小布施町／コミュニケーションが町を豊かにする
北斎が紡いだ、うるおいのあるまちづくり

40 ［シリーズ］自然浴環境——5

フランス・アルザス地方のエコ・ミュージアムによる
活性化の取り組み……❖ 藤本雅生

44 Product Message ［プロダクト メッセージ］

●道の駅「観音崎」（鹿児島県指宿市）●広島観音マリーナ（広島県広島市）●塩浜護岸（福岡県福岡市）●久里浜港（神奈川県横須賀市）●大和ミュージアム内大和波止場（広島県呉市）●みもすそ川公園（山口県下関市）●有川港ターミナル（長崎県南松浦郡）●長良川鵜飼地区護岸（岐阜県岐阜市）●神崎川緊急船着場（大阪府大阪市）●神田川和泉防災船着場（東京都千代田区）●三重県伊賀市立島ヶ原小・中学校（三重県伊賀市）●函館市電停留場「昭和橋」（北海道函館市）●大湫クリーンセンター（岐阜県端浪市）●風の道公園（青森県八戸市）●モエレ沼公園モエレ山（北海道札幌市）

57 世界のストリートファニチャー❺

中国：香港 エジンバラプレイスのベンチ

■発行日／2005年10月1日 ■発行／東洋エクステリア株式会社 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-4-12
■企画・制作／フォンテルノ 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿4-5-25-806 ■印刷／凸版印刷株式会社

特集

21世紀のランドスケープ・エコロジー

みなと MINATO を生かすまちづくり

古くから「みなと」は、
暮らしを支える物と人との交流の基地として栄え、
異文化とのふれあいの場でした。
しかし、産業活動が盛んになるにつれ、
一般の人々が「みなと」から遠ざけられてしまったのです。
そこで、文化的情緒あふれる「みなと」と人々のつながりを
現代の暮らしに甦らせる活動が、再び盛んになってきました。
特に近年は、市民が主体となった、「みなと」を活用した
個性ある地域づくりが全国で展開しています。
今回の特集では、こうしたまちづくりの実例を
取り上げながら、ウォーターフロントの
新しい可能性を探ってみます。

ウォーターフロント開発の経緯とこれからのまちづくり

話し手……横内憲久 氏（日本大学理工学部海洋建築工学科教授、ウォーターフロント計画）

ウォーターフロント研究のきっかけ

1970年代半ば、水辺の環境を生かした新たな街をつくっていくというのは世界中でたくさんありました。当時私は27歳で、隅田川の調査をやっており、そのころの日本の水辺はほとんどが倉庫や工場などで占められていました。しかしおもしろい空間もたくさんあって、こんなところに住めたらいいんじゃないかとも思ったのです。そこで、海外ではどうなっているのかと調べ始めたのが、ウォーターフロント研究のきっかけでした。

「ウォーターフロント」という単語を辞書で調べると一般には「海岸通り」「波止場」ですが、ネーミングとして考えた場合「臨海部」や「水際地域」が浮かびます。しかしどれもしっくりこなくて、結局、カタカナで「ウォーターフロント」として表現することにしました。

海外のウォーターフロントを調べると、何百という事例が出てきました。いずれ日本も外国のように水辺に住むようになるのではないかと思い、それらの事例を日本に紹介したのが1975年ごろです。その後、アメリカに10年遅れて1985年ごろから日本のウォーターフロント開発が始まりました。水際という環境を生かし、集客機能を持つ施設としては「釧路フッシャーマンズワーフ」が日本で最初に誕生したウォーターフロントといえるでしょう。

アメリカのウォーターフロント開発

こうした水際の開発がなぜ生まれたかには理由がありました。古くは1920～30年代、アル・カポネの時代です。不安定な海上輸送に変わり、鉄道や自動車が新たな輸送手段として登場してきました。そして1960～70年にかけて、荷物のコンテナ化による物流革命が起き、荷をコンテナに入れることで、まったく違う荷を重ねて大量に輸送できるようになったのです。それに合わせて船も大型化し、この大型化に対応できない

韓国・釜山の夜景　Photo by Taku Shiobara

WATER FRONT

小さな港はだんだん荒廃していきました。

アメリカではボストンやボルチモアなどがその代表例です。ボルチモアの内港は荒廃し、倉庫や工場も老朽化していき、ついにはスラム的な様相を呈してきました。そうして放っておかれた港湾地域というのは、おおよそ都市の中心部に位置しています。都心部を活用しないのはもったいないということで、1970年代に入ってようやく再開発が行われ、150ものレストランやショッピングストアを擁するアミューズメント地域に変貌しました。そのことで年間1000万人が訪れる場所になったのです。たくさんの人に訪れてもらうことによって、治安の悪さも解消されていきました。

このボルチモアのウォーターフロント開発を行ったのが、ジェームス・ラウスというボルチモア出身のディベロッパーです。彼はもともと弁護士で、「弁護士が生涯救える人の数は知れているが、まちづくりは何十万人の人に喜んでもらえる。だから私はこれをやるのです」という伝説を自分でつくったということで有名です。彼の会社であるラウス社がボルチモアやボストン、ニューヨークを手がけました。また、シドニーの「ダーリングハーバー」や日本の「天保山ハーバービレッジ」も彼らがかかわっています。ケンブリッジセブンという設計事務所が、ボストン港の一角に「ニューイングランド水族館」というエンターテインメント型の水族館を初めてつくりましたが、これとセットになったウォーターフロント開発が話題になり、このスタイルが世界中に広がったのです。

彼らは日本のディベロッパーとだいぶ違ってニュートラルな位置づけです。地元住民と役所の間に入ってちゃんと仕事をつくりあげていく、すごいノウハウを持っています。箱物だけでなくソフトのノウハウも充実している。そういったことを私たちは学びました。

日本のウォーターフロント開発

ウォーターフロント開発が、アメリカでは都市問題の解決方策から出発しているのに対して、日本の場合は土地の有効活用が目的です。現在、ウォーターフロント開発が行われている多くは大都市においてです。東京のお台場、横浜のMM21、千葉の幕張、名古屋のガーデンふ頭、大阪の天保山、北九州の門司港、福岡の百地などです。これらはショッピング系の商業施設が多く、スタイルとしてはアメリカと同じです。海という第一級の自然があり、都市の人々が欲するアメニティ空間を提供できるのは臨海部しか残されていなかった、ということもありました。それが大いに当たったわけです。バブルがはじけて全体が低迷化したものの、ウォーターフロント人気は根強く、ブームが去ったように見えますが、まだいろいろなところで取り組まれていて、しっかり市民権を得たと考えます。

しかしウォーターフロント居住を考えた場合、マイナス面もしっかり知っておかなければいけません。マンションディベロッパーの方からよく相談を受けるのですが、売り出すときにちゃんとマイナス面も伝えないといけない、とアドバイスしています。車や金属は潮風で錆びやすく、空気が湿っていて洗濯物が乾きにくい、窓ガラスは潮で真っ白になる、台風のときは雨が下から吹き上げてくる、などです。しかし、こうしたマイナス面を超える魅力がウォーターフロントにはあるので、それを生かした居住開発が行われて初めて、アメリカのようにウォーターフロントでの居住がステイタスになるのではないでしょうか。

東京で見直される港や運河

なぜお台場に人が集まるのか。商業施設で売っているものは、お台場でなくても買えるものばかりです。しかしそこには、夜景がきれい、景観がいい、海の香りがするなどの新しい環境がありました。都市生活のなかで、実感としての「海」を知り始めたのは1980年代です。隅田川の両岸には今でこそ聖路加病院やIBMがありますが、以前は倉庫だった。そういった場所の高度利用が見直されています。これからは、大きな規模の再開発地域というのはウォーターフロントくらいしかないでしょう。

今後、本格的に出てくるのは運河の利用です。江戸時代の東京にはベニスのようにたくさんの運河がありました。相当埋め立てられましたが、今でも東京港には運河が40本くらい残っています。有名なのは東京モノレールのわきを流れる京浜運河です。東京都は「運河ルネサンス」という事業をやっており、観光都市の顔をつくろうとしています。運河という装置を初めからつくろうとしたら大変ですが、既存の運河を利用して、東京の顔にしていこうというのです。

そしていま最もトレンディな運河は、寺田倉庫が手がけた天王洲アイルの「TYハーバー」で、世界でも一級の運河空間だと思います。自社倉庫を改造したレストランには地ビールなどもあり、年間15万人が訪れています。さらに、海辺のプロムナードの整備や、はしけを使ったレストランも計画されています。私の夢は「水運」の復活です。船でアクセスするというのはおもしろいし、防災時にも役立ちます。このTYハーバーは目黒川とつながっているので、船を活用してもいいですね。

日本人の約1500万人が海外旅行に出る反面、海外から日本への観光客はわずか400万～500万人程度。この格差は観光格差です。この溝を埋めるには、都市に魅力がなければ難しい。北海道が外国人に人気なのは雪の質がよくラベンダー畑の景観が美しいからです。現在東京ではディズニーランドへ行き、秋葉原で買い物をして帰るだけです。これからが本当の観光都市を目指した「まちづくり」が始まるのだと思います。

地方で港を生かした まちづくりの成功要件

地方の港湾に行くとほとんど船が入っておらず、税金を使って巨大な釣り堀をつくったのかと批判されています。しかし、世界に冠たる日本の土木技術でつくられた港は、強固な防波堤で波の立たない水域が確保されているわけです。港は50年くらいごとに補強・改修しますから、日本の港はほぼ完璧な状態です。そういったすばらしいインフラをなんとか生かして、地域の活性化に役立ててほしいですね。歴史的な遺産も、そういうところにはあります。鹿児島本港の護岸が整備されただけでも人が来るよう

ウォーターフロントが成功する10の要件

1. 囲繞（いぎょう）空間――L字形やコの字形などの土地・建物によって水域が囲まれた空間で、そう遠くない距離に対岸が見える状態。水域は一辺が500mのスクエアが適当。歩いていくと若い人では5～6分。包み込まれた印象は人々に安堵感を与える。

2. 静穏な水域――水辺の安全性が確保されている。

3. 豊富な水量――豊富な水量のある水辺は、水の多様な表情が満喫でき、親水性が高まる。

4. 都心中心部からの接近性――都心中心部に近いほど人々を多く集めるのに有利で、徒歩圏であるといわれる2km程度が望ましい。

5. ランドマークの存在――ランドマークとしては建物やモニュメントが一般的であるが、その地域固有の歴史・文化を象徴する事物、雰囲気、樹木などまで含まれ、その地域らしさを醸し出すもの。

6. 背後人口の多さ――ウォーターフロント開発では、敷地前面が水域であるため商圏は内陸の開発の半分であるといわれ、不利な立地条件を克服するには「背後人口の多さ」が必要。

7. 活発な複合的利用――工業や港湾、住居機能などの特定の機能に純化した土地利用では活気あるウォーターフロントにはなりにくく、集客能力は低下する。

8. 地域に対する高い認識――端的に言って、知名度の高い場所ほど人が集まりやすい。

9. 日常的利用の頻度の高さ――定住者にとって、日常的に利用されるウォーターフロントほど人が寄り付きやすい。

10. 利用の履歴――これまでウォーターフロントや水域を利用した経験のない地域で開発を行っても、一時の物珍しさで人が集まる可能性はあるが、地域住民の原風景にウォーターフロントがない場合、定着するにはかなりの時間が必要となる。

インナーハーバー（ボルチモア、アメリカ）／商業開発。レストラン、ショップ、水族館、オフィスなどがある

サウスストリート・シーポート（ニューヨーク、アメリカ）／マンハッタンの先端・ウォール街を背後に、イーストリバー沿いの商業開発。レストラン、ショップなどがある

グランビル島（バンクーバー、カナダ）／廃棄物埋立地跡の商業開発。レストラン、ショップ、小さい船工場（ヨットなどの製作・修理）、オフィスなどがある。右は先端のオープンカフェ部分

リバーウォーク（サンアントニオ、アメリカ）／人工運河沿いのコンベンション地区開発。ホテル（国際会議、見本市など）、レストラン、ショップ、オフィスなどがある

品川・天王洲アイルの「TY ハーバー」。天王洲運河に面したレストランは人気のスポット

になったし、指宿（いぶすき）の海岸通りを夜間照明し護岸を整備したことで、人が外に出て散歩するようになりました。コンセプトひとつで集客できる、港はその材料として十分な可能性を秘めているのではないでしょうか。

P.5に、港を生かしたまちづくりの成功への要件を掲げました。ボルチモアはこれらの要件を満たしています。背後人口について、ジェームス・ラウスは100万人いてほしいと言っていますが、それに及ばない日本の地方都市でも頑張っています。函館が30万人、小樽は20万人、釧路は釧路圏で30万人、この規模でもうまくいっています。いちばん成功したといわれているのが石川県の「七尾フィッシャーマンズワーフ」で、七尾市の人口はわずか6万人強ですが、車で20～30分のところに有名な和倉温泉があり、そことタイアップして成功しています。地方都市で成功させるにはこうしたアイデアが必要です。

また、日本で成功要件を満たしているのが、横浜の山下公園を中心とした地域でしょう。大桟橋と山下ふ頭に挟まれる格好にある山下公園は、まさにボルチモアと同じスケールです。また、港湾にこれほどの緑があるところは世界でも珍しい。利用頻度も知名度も高く、複合的利用がされています。

海を知らない日本人

日本には4000もの港があります。国土交通省が管轄する港湾がおよそ1100カ所、農林水産省の管轄する漁港が2900カ所です。日本の海岸線の長さは35000kmですから、日本には海岸線8.7kmに1つ港がある計算になる。こういう国はなかなかありません。

ところが海に取り囲まれているのに、これほど海について知らない国民はいない、と海洋小説作家・白石一郎は言っています。ちょっと引用しますと、「江戸時代以前とそれ以後の日本人は、海のかなたへの好奇心や冒険心が違う。江戸以前ははるかに生き生きとしていた。海外に渡ったものは戻れば死罪という鎖国時代が長く続き、海を嫌うことが伝統になり、国民性にまで及んだのではないか。日本中心の内向きの視点が身につき、国際感覚を摩滅させた。日本が外を向いたときは戦争で、まったく話にならない。それが今ようやく変わり始めたところかな。日本が海を介して外国とつながっていることを実感としてもっと意識しなければ」と中日新聞のインタビューで語っています。

欧米の産業革命を目の当たりにした明治政府は、国策として産業振興のために港湾や河川を特化させて、一般人が立ち入れない場所とした。そのことが今日まで影響しているのではないでしょうか。私は日本の教育現場で、もっと「海」について教えていく必要があると思っています。

地元と連携して海を守り、海を知る

35000kmもある日本の海岸線をどうやって管理していくのか、おおよそ自治体だけではカバーできません。海は広大ですので環境面での影響が大きく、そのためNPOや地元住民の方による協力が必要になります。

重要なのは、役所と住民の役割分担を明確にすることです。私は海や海岸の民間利用をある程度認めることによって、今以上の環境管理が実現すると思っています。例えばホテルのプライベートビーチのように、民間利用を促進させることで環境を守る方法などです。これまでの海の利用は漁業や海運がほとんどだったわけですが、今後の多目的で高密な海域利用を考えた場合、新たな管理方法が必要になってくるでしょう。

また、まちづくりに関連していえば、住民による歴史伝承や街案内などがあります。横浜に「横浜シティガイド協会」という、横浜の街を歩いて案内するボランティア組織がありますが、彼らは横浜に関するさまざまなマップをつくり、地元の人が横浜の歴史や魅力を解説してくれる団体です。長崎市が昨年から準備している「さるく博’06」も、地元の人たちがボランティアガイドとして長崎の歴史や文化を伝えるイベントで、より深い長崎を知ってもらえる内容になっています。

これからのウォーターフロントの課題は、周辺地域と連携し、お互いに足りないものを補い合い質を高めていくことです。そして、海に囲まれている日本だからこそ、人々に海や港を理解してもらわなくてはなりません。たくさんの人が港を訪れ、水に親しみ、もっと海を知り、自然への畏敬を抱くことで、美しい環境を次世代の子どもたちに残すことができると思っています。 NE

日本における「みなとまちづくり」の取り組み（資料提供：国土交通省港湾局開発課）

平成15年度に実施された「みなとまちづくり」の事例

❶ **稚内港**（北海道稚内市）
「歴史・文化」を活用。稚内みなと・まちづくり懇談会などが中心となり、「みなと」と「まち」を結ぶため、ゆきあかり（固めた雪を中空にし、ロウソクを灯したもの）を設置した。また、歴史的な資産である北防波堤ドームでコンサートを実施した。

❷ **室蘭港**（北海道室蘭市）
「倉庫」を活用。NPO羅針盤が中心となり、客船バース背後の既設上屋を活用したイベント（よさこいソーラン踊り、市民コンサートなど）を実施し、5700名の市民が来訪した。この経験をもとに「みなと」でイベントを行う際のマニュアルづくりに取り組む。

❸ **小名浜港**（福島県いわき市）
「倉庫」を活用。小名浜まちづくり市民会議が中心となり、港湾緑地背後の倉庫地区の利活用方策を検討した。今後、港のにぎわいの創出に向け、関係者で連携していく。

❹ **館山港**（千葉県館山市）
「景観」を活用。NPOたてやま・海辺のまちづくり塾が中心となり、砂浜上に仮設構造物（足場）を設置し、足場が通年型の海岸利用のツールとして有効であることを確認した。

❺ **敦賀港**（福井県敦賀市）
「景観」を活用。港都つるが（株）が中心となり、新設された緑地周辺において、来訪者の滞在時間増加促進のためのライトアップ案を、市民アンケートに基づき作成した。

❻ **宇治山田港**（三重県伊勢市・二見町）
「歴史・文化」を活用。宇治山田港湾整備促進協議会が中心となり、伝統的な舟参宮（船による伊勢神宮参拝）を再現した船舶の運航を試行し、平成17年から舟参宮を開始した。

❼ **舞鶴港**（京都府舞鶴市）
「緑地」を活用。NPOまちづくりサポートクラブが中心となり、港湾緑地の部分オープンにあわせてビデオなどを作成し、舞鶴西地区のPRに向けた取り組みを実施した。

❽ **宇野港**（岡山県玉野市）
「景観」を活用。（社）玉野市観光協会が中心になり、屋台村オープニングイベントを実施して、1万3000人が来訪した。平成16年度は、周遊性を高めることを目的に、市内観光共通チケットを試行する。

❾ **徳島小松島港**（徳島県小松島市）
「旅客ターミナル」を活用。NPO港まちづくりファンタジーハーバーこまつしまが中心となり、遊休化した旅客ターミナルを活用した交流センター内に、港の見えるカフェ「メーヴェ」を実験的に開設し、事業の継続性を確認した。今後もNPOによる運営を予定している。

❿ **西郷港**（島根県隠岐郡西郷町）
「旅客ターミナル」を活用。風待ち海道倶楽部が中心となり、冬季休航中の高速船待合所を、朝市、ライブコンサートなどに活用し、「みなと」での朝市には約400人が来訪した。また「みなと」と「まち」の統一サインの設置を実施している。

⓫ **八幡浜港**（愛媛県八幡浜市）
「歴史・文化」を活用。八幡浜港みなとまちづくり協議会が中心となり、朝市と連携したイベント（湾内クルーズ、みなとまちツアー）、PR活動を実施し、朝市の来訪者が20%（1000人）増加するなど大きな効果があった。今後もイベント、PRを継続していく。

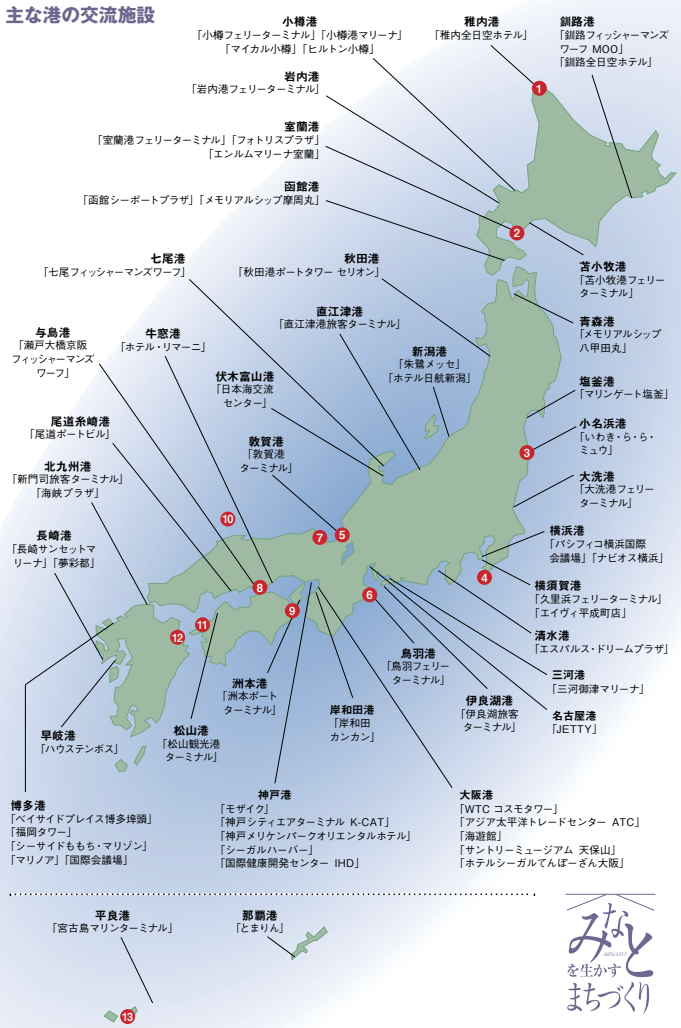
⓬ **大分港**（大分県大分市）
「緑地」を活用。NPO大分ウォーターフロント研究会が中心となり、チャレンジショップと連携したイカ釣りクルージング、クラブイベントを試行し、両取り組みとも事業の継続性を確認、今後も継続を予定している。

⓭ **石垣港**（沖縄県石垣市）
「離島ふ頭」を活用。みなと通り会が中心となり、離島ふ頭再開発に合わせたにぎわいづくりプランを策定した。今後は「みなと」と「まち」を結ぶ交差点のスクランブル化や桟橋付近でのイベント開催に取り組む。

平成14年に国土交通省の諮問機関である交通政策審議会において、みなとまちづくりの推進が提案された。このなかで、地域が個性ある発展を将来にわたり着実に進めるためには、「みなと」の資産を住民・市民の視点から再評価するとともに、観光産業や水産業などの地域産業、海に開かれた特性など「みなと」の資産を最大限活用して、市民の合意の下で美しく活力ある「みなと」空間を形成し、「みなとまちづくり」を推進することが提案されている。平成15年度、13港の「みなとまちづくり」の取り組み、成果および留意点を「みなとまちづくりガイドブック」としてまとめている。地図にはその13港を簡単に紹介した。

＊詳しくは国土交通省港湾局のホームページを参照　http://www.mlit.go.jp/kowan/minatomachi/minatomachi.html

主な港の交流施設



Case 01 門司港レトロ事業（北九州市門司区）

衰退した港町を レトロ感あふれる観光都市に 変えた景観デザイン

九州の最北端に位置する門司港は、ここ数年で北九州屈指の一大観光都市に変貌した。歴史を感じさせるレンガ造りの建物群、船だまりの入り口に架かる美しいはね橋、シックな舗装材のプロムナード、シンプルでどこか懐かしい街灯。港町の風情漂うこの空間は、年間 350 万人の来訪者を迎えるまでに成長した。いったい何がこの街を変えたのか。それは、市民と行政、コンサルや地元企業が一つになって取り組んだまちづくりが実った証だった。

［左］埋め立てを回避された船だまりは、港町の風景をつくる核となっている
［上］船だまり周辺に回遊性を持たせるために架けられたはね橋
［下］1912 年に建設された旧門司税関ビルは、修復し、休憩・展望施設として利用されている

みなとを生かすまちづくり

門司港の歴史

門司港は明治時代に計画的につくられた港町で、それまでは製塩業を主な産業とする一農漁村であった。1889（明治22）年、塩田であった土地に門司築港会社が設立されたことから門司の繁栄が始まる。この年開港。1899（明治32）年に一般開港に指定されて以来、石炭輸出港として大いに発展。その後も、北九州工業地帯の原料・製品の輸出入港としてアジアまで商圏を広げていった。最盛期には年間200隻の客船が入港し、国内航路含め年間600万人の乗降客があったといわれ、日本における四大貿易港としての大きな役割を果たしていた。大陸航路の待合室としてにぎわっていた旧大阪商船門司支店（1917（大正6）年）や、旧日本郵船門司支店（1927（昭和2）年）の高度な建築技術は、当時の繁栄ぶりを伝えている。

しかし1970年代の半ばに入ったころから、産業構造の転換により、急速に街が衰退していった。関門連絡船が廃止され、大型船によるコンテナ輸送など輸送形態の変化も影響し、船だまりが、死んだ水たまりとなってしまったのである。人口も減少の一途をたどり、かつての繁栄を偲ばせるはずのレンガ造りの建物も、古びた港町のセットのように打ち捨てられ、このあたりに人影はほとんどなかった。

門司港レトロ事業

1988（昭和63）年、JR門司港駅が、鉄道駅舎として日本初の国の重要文化財に指定された。1914（大正3）年に開業したフレンチルネサンス様式の「門司駅」（当時）は、建物のデザインの美しさだけでなく、九州最古の駅舎としての歴史的価値が高く評価された。こうした明治・大正期の優れた建造物群を有す

門司港ホテル前の港湾緑地

アルド・ロッシ設計の門司港ホテルを望む

る門司が「レトロ」と「ウォーターフロント」という、歴史遺産と自然の魅力の双方を生かしたまちづくりに向かっていくのは今でこそ自然に見えるが、当時、そこに至るまでにはさまざまなハードルがあった。

北九州市が門司港にある遺産を生かした一大観光拠点にするべく事業の検討に入ったのが1987（昭和62）年。1994（平成6）年には、旧門司税関ビルなど歴史的建造物の修復・移築を終わらせていた。しかし、レトロ事業で先行していた港湾の再開発事業では、使わなくなった船だまりを埋め立てる方向ですでに動いていた。

門司港レトロ地区の成功のカギとなった公共空間のマスタープランを担当した中野恒明氏（アプル総合計画事務所代表）は、当時を振り返って次のように語る。

「門司港の成功は、船だまりの埋め立て計画をやめさせたことでしょう。以前から地元や識者から反対の声が上がっており、私たちの提案も船だまりを残す内容でした。しかし埋め立てを前提にすでに運輸省（当時）の認可を受けていましたから、差し替えるのは並大抵の努力ではなかったと思います。当時の港湾局の担当者が第四港湾建設局と本省に何度も足を運んで計画変更の承認を得たと聞いています。当時就任したばかりの末吉興一市長の英断と彼らの働きがなかったら、どんなデザインをしても今の門司港はなかったでしょうね」

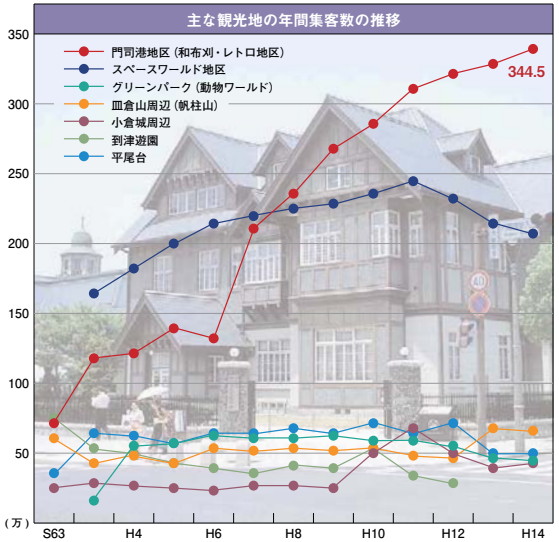
こうして残された船だまりは、門司港レトロ地区の印象を決定づける重要な核となった。図らずも、アメリカのウォーターフロント開発で大成功を収めたボルチモアとまったく同じ空間構成だった。さらに中野氏は、もうひとつの成功要因は、行政と設計者の間で緊密な連携をとることができたことだという。

「門司港レトロ事業は、竹下内閣時代に自治省が行った『ふるさとづくり特別対策事業』の補助金でスタートしました。これは計画の自由度がありましたので、現存する歴史的建造物を残すことにポイントを置き、あえて“つくらない”事業を目指しました。それに当時の運輸省の歴史的港湾環境創造事業が加わり、緑地系のオープンスペースの整備が並行して進んでいきました。磨けば宝石になるような建物がたくさんありましたからね。縛りがなかった分、全体をつなぐ触媒のような動きがとれるようになったのです。地区全体の景観デザインをやらせていただきながら、建築、港湾、商業、緑地、道路と、それぞれの分野と連携していくことができました」

中野氏のこうした動きが、全国でも珍しい公共空間主導のアーバンデザインを実現させた。従来の縦割り行政では決してできなかった空間全体の質と密度は、みごとに整合し気持ちのよい環境となっている。景観デザインという仕事の本質が見えてくる。

石畳の道は、左側が旧運輸省の港湾緑地で右側が自治省だが、一体的に整備した例。レトロなコンクリート照明柱は1990年度のグッドデザイン景観賞を受賞（設計：アプル総合計画事務所＋南雲勝志）

国際友好記念図書館。友好都市である中国大連市に建設された図書館の復元。前庭広場はレンガ舗装し、芝生部分のレベルを少し上げることで船だまりの視点に変化をつける



手前がアルド・ロッシ設計の「海峡プラザ」。右奥に見えるのが旧大阪商船ビル

いい街とは地元の人が誇りに思う街

門司港レトロ地区がグランドオープンしたのが1995（平成7）年。以来、JR門司港駅の駅前広場や親水広場で、さまざまなイベントが開催されている。にぎわいづくりの大きな推進役が「門司港レトロ倶楽部」だ。地元・民間・観光協会・行政が連携し、門司港レトロ地区の観光振興と地域の活性化を一体となって推進することを目的に1995年12月に設立され、門司港レトロ地区で催されるイベントの企画・運営、PR活動などを行っている。門司港レトロ倶楽部の設立当初から常駐し、企画運営を担当する上田曜子さんは、街の反応を次のように話してくれた。

「門司港はほんとに寂れた街でしたから、古い建物がまさか観光資源になるとは皆さん思っていなかったようです。それが数百万人も観光客が訪れるようになったのは感慨深いことでしょう。地域への誇りが生まれたことで、皆さん非常に協力的です。設立からちょうど10年。これからの10年は、レトロ地区に集中する来訪者を、商店街などもっと街中に誘導するような仕掛けを考えていきたいと思っています」

門司港地区は、1988年に70万人だった観光客が2003年は350万人となるなど、15年間で5倍に急成長している。しかし、そのことで新たな問題も生じてきた。例えば観光地特有の一極集中型の弊害であり、門司港の場合は保存された船だまり近くに来訪者が集中して半ばテーマパークの様相を見せ、周辺の、生活感のある門司港らしいたたずまいを味わうことなく、あわただしく通り過ぎてしまう人が多い。今後は魅力

JR門司港駅前のレトロ広場

スポットにもさらに面的な広がりを持たせ、奥行きのある街にすることを目指している。

まちづくりに参加したときはまだ三十代前半だったという中野氏が、門司港にかかわってかれこれ20年近く。「まちづくりの街医者」を自認する彼の「いい街」とは？

「地元の人が街を誇りに思い、がんばっているからいい街なんです。観光客というのはそういう人たちとの交流を求めてくる。美しい街というのは、地元の人たちが維持している活動そのものが美しいのです。映画のセットのようなものはいずれ廃れると思っています。門司でも、ちょっとキッチュでもいいからレトロチックに、という話があったのですが、反対しました。門司港にある古い建物は当時の最高技術で造られている。そこに"まがい物"はないでしょう。観光客というのは何百万人が訪れても、一過性のものです。10万人の地元の人のほうが経済効果はあります。ですから地元の方々が快適だと思えるデザインをしていく必要があり、それが結果として観光にもつながっていくと思っています」

＊

2002（平成14）年、新しく創設された土木学会の「景観デザイン賞」で、門司港レトロ地区環境整備が満場一致で最優秀賞を受賞した。歴史的建造物や自然環境など資産を生かすための環境デザイン手法、レトロをキーワードにした歴史に耐える本物志向のデザイン、地元市民が継続してまちづくりに参画し快適な歩行空間・水際空間をつくりあげた姿勢、などが高く評価されたのである。

地方がますます厳しくなっていく時代、いかに街の資産を発掘し価値を高めることによって、住民が誇りに思う街を育てるか。地方のまちづくりはこれからが本番だ。 NE

［上左］親水広場 ［上中］海峡プラザのにぎわい ［上右］JR門司港駅前レトロ広場の噴水
［下］海峡プラザ前の休憩施設。テーブルとベンチは市が設置した

中野恒明氏がこれから提案したいこと
新たな門司港都市再生計画に向けて

北九州市は空襲を受け、戦後に区画整理されているのですが、小さな路地を残したまま整備されたので、風情のあるいい路地がたくさん残っています。そこで、界隈散策のために道標を整備しましょうと提案しました。今年度から動きだすと思います。まちづくり交付金などを活用した新たな「門司港都市再生計画」です。

また、まだ保存していなかった建物、例えば旧大連航路の上屋、客船ターミナルが壊されそうになっていたので、保存を提案しています。戦前の建築家・大熊喜邦（1877～1952）による設計で、国会議事堂や旧横浜銀行集会所、旧山口県庁などの設計者でもあります。現在、土地も建物も国の施設で、市が管理しているのですが、全体を港湾緑地とし、休憩所や展望所に再生できたらいいと思っています。古い建物を保存するために地元の方々が基金をつくり、昭和初期にできた三井物産の社宅をリニューアルして使ったりしています。そういった意味でも、次は広がりを持った内容になりそうです。

市のほうも、集客数を現在の年間350万人からさらに増やしていこうとしています。2006年3月16日の新北九州空港の開港予定に向けて、市長も観光客倍増計画を言い始めました。残したかったたくさんの建物がありますから、その機をとらえてリニューアルの方法を提案していきたいと思っています。（談）

Case 02 長崎港の水辺再生（長崎市）

港と歴史的まちなみの融合。歩いて知る新しい長崎

江戸時代の鎖国政策のなかで唯一、
貿易港として海外に開かれていた長崎。
町には今もその面影が色濃く残り、観光地として全国に知られている。
しかし、時代の変化で観光客は減少。人々にとって魅力ある町とは何か。
長崎は港を持つ町ならではのまちづくりを実践し、長崎臨海地帯の再開発が
一段落する 2006 年に向けて大きく花開こうとしている。

みなとを生かすまちづくり

長崎出島ワーフ。飲食店が軒を連ね、港を眺めながら食事が楽しめる

大型船のほか、ヨットも停められる

水辺の森公園。家族連れが多く見られる

海辺に生まれた新しい施設群

古くから港町として知られる長崎だが、意外なことにこれまで、東京のお台場や横浜のみなとみらいのように、港に人々が集う施設がなく、一般には活用されてこなかった。その理由として挙げられるのが、海に小高い山が迫り平地が乏しいという地形、そして、かつては軍艦もつくられていたなど、造船による臨海部の閉鎖的なイメージである。

しかし近年、造船、水産業の停滞、都市機能の市街地への集中などといった問題が浮上。その問題を解決すべく持ち上がったのが「ナガサキ・アーバン・ルネサンス2001構想」である。この長崎都心・臨海地帯の再開発構想は1986（昭和61）年3月から始まり、商業施設「夢彩都」「長崎出島ワーフ」をはじめ、2004（平成16）年3月には「長崎水辺の森公園」、2005（平成17）年4月には同公園内に「長崎県美術館」がオープン。2006（平成18）年春には世界でも有数の長大斜張橋「女神大橋」などもでき、主だった施設が一通り完成する。

［上］水辺の森公園「大地の広場」。芝生と海がつながり開放感あふれる空間　［下左］風待橋。公園内には運河が流れ、いくつか橋が架かっている　［下中］長崎出島ワーフにある店舗2階からの眺め。左手が水辺の森公園　［下右］長崎美術館裏手にはゆるやかなスロープが続く。手すりにはライトが埋め込まれ夜間に通路を照らす　［右］長崎美術館の建物の間にも運河が流れている。運河ギャラリーや運河劇場としても利用される

そのなかでも特に長崎水辺の森公園は「"土地の記憶"を継承する大地の舞台」をコンセプトに、海辺から広がる芝生の広場や公園内を巡る運河、舞台をイメージした石畳などで構成され、気持ちのいい水辺の空間を演出。2004（平成16）年度のグッドデザイン賞を受賞するなど優れたランドスケープデザインとなっている。さらに建築家・隈研吾氏により、長崎の石畳をイメージして設計された長崎県美術館ができあがったことで、公園一帯の景観がいっそう際立ったものとなった。昼間は平日でも家族連れが多く見られ、新しい長崎の憩いの場として人々に定着しつつあるようだ。

回遊できる町にしたい

「この構想は人々に港と触れ合ってもらえるようにと始まったものでもあります。臨海部の開発によって、これまでは山の上から眺めていた海が、水辺からの景色も素晴らしいのだと認識されたことで、明らかに人の流れが変わりました。しかし港が注目される一方で、これまでの繁華街である浜の町が取り残される可能性が出てきました。これからの課題は、少しずつ距離の離れている浜の町と長崎駅、港の3拠点をどうつなぎ、人々を巡回させていくかということです」と話すのは財団法人ながさき地域政策研究所（通称：シンクながさき）の常務理事・菊森淳文氏。同研究所は県の外郭団体で、調査、政策立案、具体的案件の審議などを多方面にわたり行っている。その地元に根ざしたシンクタンクという視点から、これからはもっと外に対しての演出も必要だと言う。

ハード面の整備はできつつあるが、観光客は景観だけでなく、その町ならではの習慣や歴史的背景を楽しみたいというソフト面も求めている。そのソフト面に着目した取り組みを行っているのが、長崎市の「長崎市観光2006アクションプラン」である。

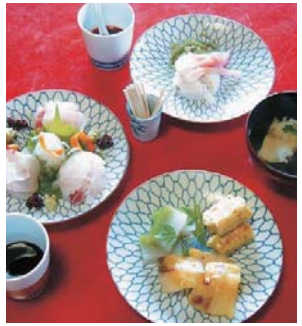
「平成2年の長崎『旅』博覧会をピークに観光客数は減少しています。その背景には、団体旅行で名所を見て回る観光から、個人で自由に見て、食べ、学ぶといったオリジナリティ重視の観光へと移行していることが挙げられます。長崎は歴史を学べる地であり、また2006年に向けて新しい施設が続々とできている。こうしたことを踏まえ、長崎市全体がパビリオンとなり、歩くことで町を知り、楽しんでもらう。長崎の魅力を深く体験してもらおうと考えた企画です」と、長崎市企画部総合企画室主幹の島崎昭秀氏は語る。そして同プランの柱となるのが、日本で初めての町歩き博覧会「長崎さるく博'06」である。

［上］美術館屋上からの眺め。港が一望できる
［下］シンクながさき常務理事の菊森淳文氏。奥は専任研究員の鶴田貴明氏

「さるく」とは長崎弁で「ぶらぶら歩く」という意味。単なる名所を巡るのではなく、長崎にゆかりのある約2 kmのコースをガイドが解説しながら2時間ほどかけて散策する。そしてこの博覧会の特徴は、行政はルールづくりなどのサポートにとどまり、実際の運営は地元住民が行う市民主体のイベントであるという点である。「長崎はローマだった」「ハイカラさんが往来しよらす」「媽祖様と唐りゃんせ」といったユニークなネーミングからなる約40ものコースは、80人以上の市民プロデューサーたちがルートを考えた。もちろん案内役のガイドたちも市民のボランティアだ。現在は講習を修了

［左］山の上から望む海は、住民にはなじみ深い風景　［右］西の坂に立つ日本二十六聖人記念聖堂。後ろの斜面には家々が立ち並び、長い階段が設けられている

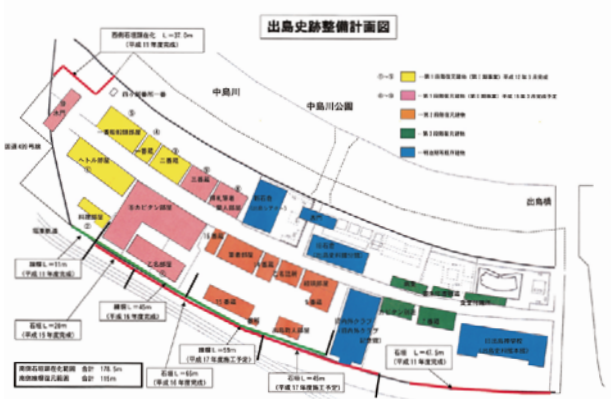
［左］長崎さるく博'06推進委員会事務局広報宣伝班リーダーの高橋秀子さん　［右］長崎市企画部総合企画室主幹の島崎昭秀氏　［下］長崎さるく博'06のコースマップ「長崎港水辺散策～出島ワーフ・長崎水辺の森公園～」。ガイド付きの約40コースは予約制。http://www.sarukuhaku.com



長崎の郷土料理「しっぽく料理」

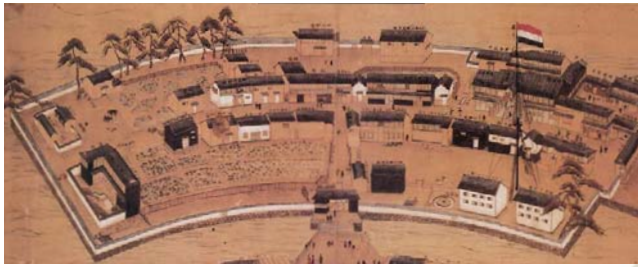
グラバー園。かつて外国人の居留地だった

出島復元プロジェクトで復元された出島の西側部分



出島史跡整備計画図

「一番船船頭部屋」内、商館員の部屋。内部も当時を再現している



伝川原慶賀筆「長崎出島之図」。長崎大学附属図書館経済学部分館蔵

した200人以上が認定されており、最終的には350人のガイドを養成するという。

すでに2004年には、この博覧会を市民によりよく理解してもらうためにと、コース数を縮小したプレイベントを行った。プレイベントには予想以上に多くの人たちが参加し、その手応えを感じているという。なかでも人気があったのが、長崎の郷土料理「しっぽく料理」を老舗の富貴楼で楽しみ、その周辺を巡るコース。食事代が加わるため参加費は割高だったが、女性を中心に支持を得た。

「長崎に来てくださる方をおもてなしするという意識で取り組んでいます。地元住民が案内することで、異文化が混じり合った“わからん（和華蘭）まち”をよりよく知ってもらい、また来てみたいと思っていただけたら。2006年を節目として博覧会を行いますが、その後もこの取り組みは続けていきます」と、長崎さるく博'06推進委員会事務局広報宣伝班リーダーの高橋秀子さん。

歴史の大舞台を復元する試み

そして、長崎を語るうえで欠かせないのが「出島」。明治以降の周辺部の埋め立てにより原形が失われてしまったが、現在、19世紀初頭の扇形の島を再現しようと「出島復元プロジェクト」が進行している。すでに一部の建物が復元され一般公開されており、2006年には第二期工事が終了して西側部分の町並みが再現される。

「明治期に民有地化されていましたが、1922（大正11）年に国の史跡に指定され、オランダからの強い要望もあって、長崎市では1951（昭和26）年度から整備計画に着手しました。長崎市としてもまちづくりの重要な核となることから、1996（平成8）年度から本格的な復元事業を行っています。鎖国期の江戸時代において、オランダを通じて世界を知ることができた歴史的にも重要な場所であり、また出島がいかに狭く閉鎖的だったかも、復元した町並みを通して体験できますよ。さるく博で、もっと多くの方に来ていただけると期待しています」と長崎市教育委員会出島復元整備室係長の平俊隆氏は語る。

長崎市教育委員会出島復元整備室係長の平俊隆氏

港町ならではの景観と歴史的背景を生かし、現代的な姿をつくりだしている長崎。古さと新しさがうまく調和した町並みを“さるく”ことで、その深い魅力が実感できることだろう。 NE

Case 03 蔵のまち河崎のまちづくり（伊勢市河崎）

勢田川に「海の駅・川の駅」を整備して船参宮を復活

伊勢神宮で有名な伊勢市。
これほどの歴史資産を有しながらも
観光客が激減するという厳しい時代を乗り越えて
現在、年間 600 万人の来訪者を迎えている。
観光地の活況を取り戻した伊勢市が
次の式年遷宮*（2013 年）に向けて取り組んでいるのが
勢田川の水運によってかつて“伊勢の台所”として栄えた
「蔵のまち河崎」のまちづくりである。
連なる切妻のシルエットが映える
水面を、美しい木造船が滑るように走る。
伊勢神宮につながるもう一つの道が復活する。

＊式年遷宮とは、伊勢神宮内宮、外宮の社殿を20年ごとに新しく造り替える儀式。この制度は第四十代天武天皇により定められ、次の持統天皇の代から1300年にわたり続いている。社殿は「唯一神明造り」という神宮独特の建築様式で、お米を納める倉を起源とし、礎石のない掘立柱と萱葺き屋根が特徴。第62回の式年遷宮が2013年に予定されており、それまでに遷宮にちなんださまざまな行事が執り行われる。

みなとを生かすまちづくり

河崎、勢田川沿いの蔵のある風景

80年代、客足が激減した伊勢市の挑戦

江戸時代に流行した「お伊勢参り」で、全国からたくさんの人が伊勢の地を訪れた。特に1830（文政13）年の「おかげ参り」では400万人の群集が押し寄せたこともあったという。しかし参拝者の宿泊、案内を業としていた御師（おんし）制度が1871（明治4）年に廃止され、伊勢の経済は徐々に冷えていった。

戦後はその状況がさらに加速し、1980年代には伊勢神宮内宮門前町の往来者が年間20万人と低迷。危機を感じた地域の人たちが、800mに及ぶ門前町「おはらい町」の町並みを再生。さらにこの通りに本店を構える地元有力企業「赤福」（1707年創業）が、140億円の私費を投じて建設した「おかげ横丁」が1993（平成5）年にオープンした。そうして、一時は年間4万人まで落ち込んだ来訪者が、2002（平成14）年にはおかげ横丁だけで300万人となる。

「おはらい町」の再生にかかわった当時の企画調整課長で、伊勢商工会議所専務理事を務めた阿形次基（あがたつぎもと）氏は振り返って次のように語る。

「30年前のおはらい町は正月以外に歩いている人の姿はありませんでした。伊勢神宮は20年に一度『式年遷宮』といってお社を造り直すので、伊勢の町はいわば再生する町。ならば伊勢らしい建物の並ぶ町をもう一度つくろう、ということになり、1979（昭和54）年から再生計画がスタートしました。建物は、江戸後期から明治初期の建築様式で、神宮の平入（ひらいり）に対して民家は妻入にし、外壁は、風雨の強い伊勢志摩ならではの“きざみ囲い”にしています。おはらい町の『まちなみ保全整備基準』は全部で12項目あり、これは町の人みんなで決めました。地元の強い意識がなかったら、あの町並みは実現しなかったでしょうね。

いま、おはらい町・おかげ横丁の滞留時間は増えていますが、今後は泊まり客の増加と交通渋滞対策が課題です。また、町の懐の深さを感じてもらう意味でも、勢田川沿いの河崎や二軒茶屋の整備にも期待しています」

伊勢神宮内宮の宇治橋

おはらい町の中央にあるおかげ横丁

伊勢特有の切妻・妻入の町並みに再生された、おはらい町。旅館、餅屋、酒屋、薬屋、土産物屋が立ち並ぶ懐かしい街道の風景

NPO 法人伊勢河崎まちづくり衆が運営する「伊勢河崎商人館」。大きな酒問屋の蔵群を買い上げ、まちづくりの拠点とした

伊勢河崎商人館は登録有形文化財となっている

伊勢河崎商人館　見取図

当時の生活がわかる商人館の内部。ボランティアガイドが歴史と文化を伝えてくれる

蔵のまち河崎の保存運動

伊勢市には五十鈴川、勢田川、宮川の3つの川がある。その勢田川の水運で栄えた河崎の本通りには、切妻・きざみ囲いの美しい外壁の蔵が、細い路地・世古（せこ）を挟んで何棟も立ち並んでいた。しかし輸送手段が車へと変化するなかで、細い道にはトラックが入れず、問屋センター機能そのものが外部転出し、急速にベッドタウン化していった。

1974（昭和49）年7月7日、集中豪雨により勢田川が氾濫。七夕水害と呼ばれ、伊勢市の60%が水浸しになった。その結果、当時の建設省（現・国土交通省）は300億円の予算を組んで、勢田川の川幅を広げる改修計画を発表し、河崎地区の約90戸が立ち退きの対象となった。このとき、町並みに対する配慮がまったくないこの計画に、多くの住民が反対に立ち上がった。外部からの協力もあり「町を壊さなくても治水はできるはず」と対案の検討を続けたが、国の方針は変わらず、1982（昭和57）年に立ち退き工事が始まった。

しかしこの反対運動のなかで、町のすばらしさを有識者たちから指摘され、自分たちの町のよさを再発見することになる。このとき調査に入ったのが、当時、日本ナショナルトラスト調査団長の藤島亥二郎・東京大学教授、伊勢河崎町並み調査団として西山卯三・京都大学名誉教授、三村浩史・京都大学助教授ら京大グループのほか、奈良女子大学の西村一郎助教授、長崎総合科学大学の片寄俊英教授、全国町並み保存連盟顧問の石川忠臣氏らだった。

1979年、市民、建築士会および有識者などからなる「伊勢河崎歴史と文化を育てる会」が発足し、町並み保存運動が進んでいく。立ち退き工事で勢田川右岸のほとんどの蔵が取り壊されていたが、それでも昔の商人町の面影が残る蔵が随所に残されていた。1982年に「河崎まちなみ館」を開設し、1985（昭和60）年には伊勢市観光資源保護財団が「河崎町並み案内板」を4基設置するなど、徐々に保存運動が展開していった。

1997（平成9）年に伊勢市は市民参加型の「都市マスタープラン」を公表。その中で勢田川を「歴史観光交流軸」と位置づけ、特に古い町並みの残る河崎を「歴史文化交流拠点」とし再評価した。河崎の町並み保存はようやく、実態の伴うまちづくりへと展開していく。そして2002年にまちづくりの拠点「伊勢河崎商人館」がオープンする。

NPO法人伊勢河崎まちづくり衆副理事長を務める村田幸男氏は、当時を振り返ってこう語る。

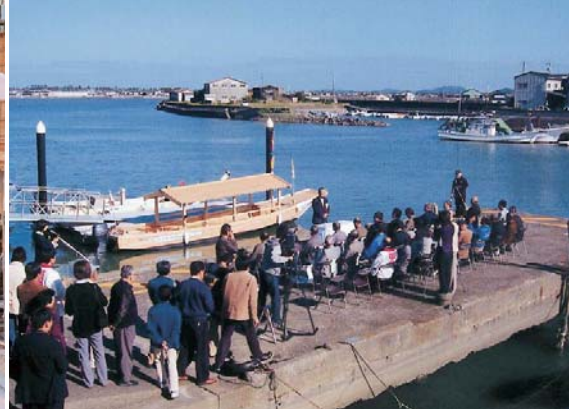
「このまちにある蔵をもっと活用していきたいということで、1996（平成8）年より『蔵バンクの会』をつくり、持ち主に働きかけていきました。活用することが保存の最大の武器となると思っていましたから。酒問屋・小川商店さんの土地は600坪の広さで、たくさんの蔵がありました。当主がまちづくりのメンバーだったのですが、あるとき突然、メンバーから退いた。この蔵群を壊してマンションを建てると言うのです。確かに老朽化してお化け屋敷のようになっていましたからね。しかし小川さんも本当は壊したくはなかったのです。

そこで、当時市会議員をやっていた私と建設部長とで、伊勢市の都市マスタープランの中に『歴史と観光の交流拠点』という項目があったことをうまく利用できないかと考えました。拠点づくりの予算で小川商店の敷地を市に買い取ってもらおうとしたのです。

あとの運営はわれわれが独立採算でやるということで、市長を口説きました。土地代と改修で5億円近くかかりましたが、この建物はこの辺りの代表的な商家構造なので、これを残したことによって本通り一帯の価値がぐっと上がりました。拠点づくりに成功したわけです。そしてできた伊勢河崎商人館を運営するために、1999（平成11）年『NPO法人伊勢河崎まちづくり衆』を立ち上げました」

こうして河崎のまちづくりが本格的に始動する。そして勢田川を生かした古来の「船参宮」が復活するのである。

河崎の本通りには蔵を生かしたさまざまな店がある。蔵を改装したこだわりの喫茶店や着物の古裂で作る小物やアンティークのお店、地元の新鮮な魚を厳選して出す居酒屋など、ふらりと入っても楽しめる。写真左は NPO 法人伊勢河崎まちづくり衆副理事長・商人館運営部長の村田幸男氏



［左］伊勢船型復元木造船「みずき号」の製作過程　［右］2004年11月13日に神社港で「みずき号」の完成披露が催行された

［左］神社「海の駅」仮駅舎の２階に展示されている船大工の道具の数々。案内してくれたのが中村清氏　［右］中央写真の白いセーラー服姿は若いころの中村氏

「伊勢船型」の復元がもたらした船参宮の復活

「神社（かみやしろ）というこの地域は、木造船から始まる造船業や海運業が主で、参宮客の海の玄関口として栄えました。隣の大湊（おおみなと）は、豊臣秀吉が朝鮮出兵を企て、九鬼嘉隆（くきよしたか）に命じた日本丸の建造など、歴史に残る造船技術をもつ地域です。大湊が大きな船を造り、神社では小さな船を造っていました。伝馬船（てんまぶね）といいまして、機帆船（きはんせん）が活躍していた時代に、いわば自転車代わりに使う小さな船です。昔はきちんとした港がなかったので、伝馬船が荷の中積みとして陸と船を行き来したのです」と語るのは、NPO法人神社（かみやしろ）みなとまち再生グループ理事長の中村清氏だ。

地域の技術を継承していくためにも木造船を復元したいという思いから、地元の船大工を訪ね歩き、ようやく数人が見つかった。すでに75歳を超える高齢者ばかり。復元作業はすべてビデオに撮り、しっかり記録を残すことにした。船の名前は、2004年アテネオリンピックで金メダルを取った伊勢出身のアスリート・野口みずきさんにちなんで「みずき号」とされた。

「4人の地元の船大工さんとわれわれで造りました。船をつくる木を探すことから始め、スギとヒノキを3本切りました。伊勢の伝統木造船である『伊勢船型』は洋船と違って竜骨やあばら骨のないつくり方をします。すごい技術ですよ。板図といって、一枚の板に横から見た姿を描くだけです。船に使われる板はどれ一つとっても平らなものはありません。独特の道具を使って、火であぶって板を曲げ、水をかけて、を繰り返しながら勘でつくっていきます。『みずき号』は伊勢の木造船の最後となるでしょう。宝物だとみんな言っています。木造船の寿命はせいぜい10年。船の乾燥を防ぐために毎日朝夕2回、沖へ行き海水をかけてはかき出して、大切に管理しています」と中村氏。

現在、神社「海の駅」仮駅舎の2階には、船大工の貴重な道具や模型が丁寧に展示されている。中村氏の船への愛情がここにも表れている。

せっかく復元された「みずき号」で、かつての船参宮を復元しようと、伊勢市が勢田川の大湊と神社の2カ所に「海の駅」、二軒茶屋と河崎の2カ所に「川の駅」を整備した。今は、土・日に1便だけ定期就航し、それ以外は貸切りとなっていて、運航管理を中村氏のNPO法人が受け持っている。現在、法人会員は30人。港まつりや朝市の企画、空き家の活用、郷土資料の収集展示などを行っている。2005年秋には神社の海の駅舎も完成し、本格的な拠点となっていく。

＊

伊勢河崎商人館ができてようやく3年。河崎への年間来訪客は約4万人、うち入館者は1万人程度。「あまり焦らないようにしたいと思っています。まちづくりは最終的には“人”です。そこに住む人が楽しく生きることが何より大切。今後は、高齢化率が43％という河崎に、若い人が戻って住めるような環境づくりをしたい」と村田氏。

伊勢河崎まちづくり衆の活動が奏効してか、大阪や東京からこの土地に移住し、蔵を改造した喫茶店や雑貨屋を開いたりする人も出てきた。また、蔵の雰囲気を生かして伊勢の旨い魚を食べさせてくれる居酒屋が本通りにオープンし、二軒茶屋にも古い蔵を移築した「麦酒蔵（びあぐら）」というレトロな雰囲気の地ビールレストランが登場するなど、徐徐に観光地としての顔ができつつある。

そして最後に、伊勢の移り変わりを見てきた前出の阿形氏はこう語った。

「戦後、伊勢は国家神道と結び付けられて敬遠される憂き目に遭いました。しかしここを訪れたブルーノ・タウトは『……伊勢神宮には古代のままの詩と形がいまなお保存されている。ここはヨーロッパ人の言う意味の宗教はない。しかし伊勢神宮に対する崇敬の念を誰が拒み得ようか。……』と日記に書いています。森の中にある建物を見て『桂離宮の前にこれを見るべきだった！ここに日本の原点がある』と言ったそうです。まちづくりは永遠ですね。何を残して何をつくり変えるか。伊勢の文化、心をどう伝えるかがこれからの課題です」 NE

二軒茶屋「川の駅」の駅舎と展示

二軒茶屋「川の駅」。広い空とゆったりとした勢田川の風景はどこか懐かしい

400年前から旅人をもてなしてきた餅屋「二軒茶屋餅」

ビアレストラン「麦酒蔵（びあぐら）」。レトロな雰囲気で地ビールが楽しめる

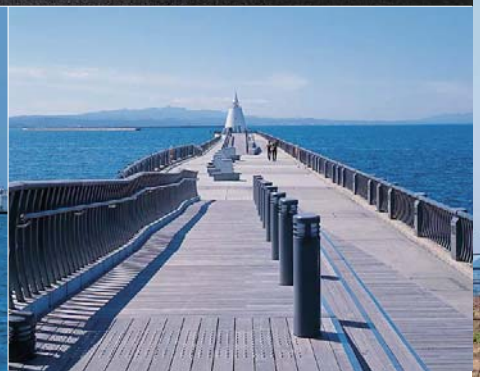
前・伊勢商工会議所専務理事の阿形次基氏

景色を眺め、散策できる防波堤

青森ベイ・プロムナード

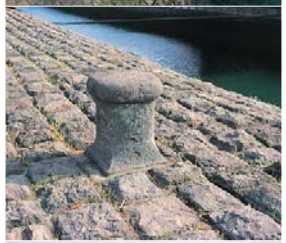
みなとを生かすまちづくり

護岸の風景 1



本州の北の玄関口である青森港本港地区の、2004年4月に供用開始した親水防波堤「青森ベイ・プロムナード」は全長310mで、防波機能だけでなく親水性ももたせ、先端部分には円錐形の美しい灯台が設置され、シンボルゲートの役割を果たしている。堤内には展望デッキ、階段状のベンチ、ボードウォーク、イベントスペースがあり、展望デッキからは津軽半島、下北半島などが一望でき、これまでなかった「海側から見た美しい青森港」の景色を堪能できる。舗装材はすべてノンスリップ仕様とし、11カ所に緊急用の救命はしご、浮き輪が常備されるなど細かな安全対策がとられている。

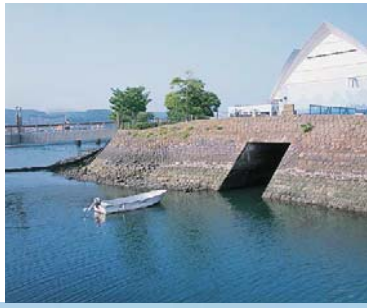
設計：青森港本港地区北防波堤景観設計検討委員会



無骨な石積み護岸が歴史を伝える

鹿児島本港の歴史的防波堤

護岸の風景 2



鹿児島本港の「一丁台場／新波止」は当初埋め立てられる予定だったが、江戸時代に造られた沖合防波堤として希少価値があり、鹿児島の石造技術が反映されていることなどから、前面に水路を残し、その姿を保全することになった。石積み防波堤をたくみに保存・修景し、ボードウォークや防護柵は歴史的な雰囲気に調和させている。防波堤上は埋め立て護岸としての転用のほか、北埠頭に残る旧白灯台から南埠頭基部の旧赤灯台を結ぶ親水プロムナードとして広く人々に利用されている。1998年3月完成。2001年土木学会デザイン賞優秀賞受賞。

設計：(株) 地域開発研究所

アーティストがつくる護岸の風景：中国

花崗岩の石肌を生かしたダイナミックな造形

YiWi South Riverbank

义乌江南岸大坝（2003年）

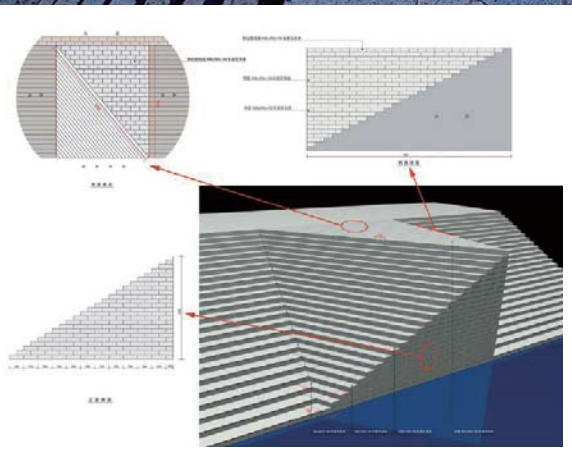
Photos：Mao Ran

ジンファ（金華：Jinhua）は中国・浙江省にある古都で、現在の町の指導者たちは工業化を進めるかたわら、都市の伝統や景観などを残すことに重点を置いている。

また彼らは、地元の文学的遺産には特別の誇りをもっている。金華出身の詩人・艾青（アイクイン）（Ai Qing　1910-1996）は、現代詩で最も敬服されている詩人のひとりである。そして、彼の息子の艾未未（アイウエイウエイ）（Ai WeiWei）は、現代アーティストとして日本でも知られている。

ジンドン（Jindong）新地区の政府は、艾青を追悼してイーウー（Yi Wu）川の護岸をデザインするよう艾未未に要請した。

その川の護岸には、現在の都市と新しい都市像とが交わる場所が誕生した。地元で産出する花崗岩を特別なサイズに加工し、それらを用いて三角形の造形をもつ彫刻的な護岸が造られた。



艾未未（Ai WeiWei）
1957年北京生まれ。78年北京電影学院卒業後、81～93年ニューヨークに留学。以後、北京を拠点に活動。アート、インテリア、建築、ランドスケープ、都市計画など幅広く展開している。96年に設立したギャラリー「芸術文件倉庫」のキュレーターとして、中国の若手アーティストの展覧会を企画するかたわら、ヘルツォーク&ド・ムーロンと協働する北京オリンピック国立競技場のコンサルタントもこなす。

港湾・海岸に求められる防災対策

みなとを生かすまちづくり

話し手……国土交通省港湾局海岸・防災課

近年、地震や台風などの自然災害が深刻化している。2004年に発生したスマトラ沖地震での被害状況は、人々に大きなショックを与えた。特に地震大国といわれる日本においては、このような津波による災害は他人事ではすまされない、わが身にも起こりうる重要な問題だ。日本の港湾や海岸を所管する国土交通省港湾局ではどのような対策を行っているのだろうか。同省同局海岸・防災課に話を伺った。

1 国土交通省港湾局海岸・防災課における取り組み

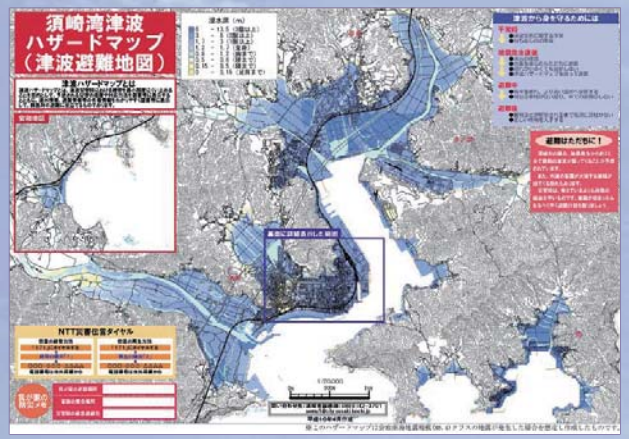
大規模な災害が発生した際には、海からの緊急物資の輸送が非常に重要な役割を担います。そのためには、大きな地震でも壊れない岸壁が必要であり、現在、全国で耐震強化岸壁の整備というものを進めています。

また、津波や高潮被害を軽減するためには、護岸や堤防の整備と合わせて、浸水想定地区や避難地・避難ルートなどを示すハザードマップにより、住民の方の確実な避難を実現することも重要です。国土交通省港湾局では、市町村が作成する津波・高潮ハザードマップの作成に対するさまざまな支援を行っています。近年では、住民の方が主体となってハザードマップを作成することにより、防災意識の向上や地域に即したマップの作成などに取り組むとともに、新しい数値シミュレーションの開発やアニメーションの使用などによる精度向上についても調査を行っているところです。

2 近年発生した災害から防災対策を再検討

2004年は、観測史上最多となる台風の上陸、新潟県中越地震の発生など、非常に災害が多い年となりました。また、2005年3月に発生した福岡県西方沖地震では九州地域の約6割の麦を扱うなど、九州の物流の中心を担う博多港が大きな被害を受けました。

さらに、2004年末のインド洋大津波による未曾有の被害は、わが国における津波対策の重要性について再認識したところです。このようなことから、専門家の意見を聞きながら、港湾において必要な防災対策について再検討を行ったところです。



［左］ワークショップの様子　［下］津波ハザードマップの例

「地震に強い港湾のあり方」
（平成17年3月）
交通政策審議会答申の概要

「ハード対策を中心とした施設整備からハード・ソフト対策の一体的な展開へ」「行政を主体とした取り組みからさまざまな関係者との連携へ」「整備量の目標から必要な機能の目標へ」などの新たな視点のもと、これまでの港湾における大規模地震対策の見直し。

各地で大規模地震の発生が切迫するなか、災害に強い海上輸送ネットワークの構築と地域の防災力の向上を図るため、大規模地震時に港湾に求められる防災機能を明確にし、それぞれの機能を強化する施策の強力な推進が必要。

【港湾における大規模地震・津波対策の展開】

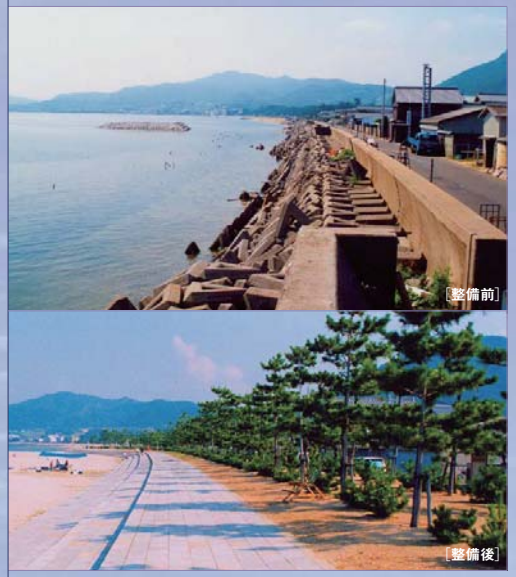
(1) 災害復旧における防災拠点機能の強化
- ●大規模地震の切迫性や海上輸送への依存度等を考慮した耐震強化岸壁の整備
- ●仮設住宅の建設や大量に発生する瓦礫の仮置・処分用地としての港湾の利用　等

(2) 被災地域における物流拠点機能の強化
- ●コンテナターミナルの耐震化目標（既存ストック施設量の3割）の見直し
- ●緊急物資輸送やコンテナ輸送以外の重要な岸壁についても耐震性を向上　等

(3) 代替輸送に対する支援機能の強化
- ●岸壁の相互利用等の港湾間連携の強化
- ●港湾被災情報発信システムの構築　等

(4) 津波災害に対する防護機能の強化
- ●避難施設等の整備による港湾労働者等の避難対策の強化
- ●GPS津波計によるリアルタイム観測
- ●津波防護効果を考慮した防波堤の整備　等

【対策の着実な推進に向けての取り組み】
- ●関係行政機関や民間事業者による地震・津波対策協議会を組織
- ●耐震強化岸壁の再点検
- ●各港の対策状況の評価、公表　等



津田港海岸（香川県）の整備前と整備後の写真

［左］GPS観測のイメージ図　［右］高知県室戸沖のGPS津波計

［左］ナウファス観測地点図
［右］ナウファスHPトップ画面

【ナウファスURL】http://www.mlit.go.jp/kowan/nowphas/

3 景観や利用者を考慮したウォーターフロントや海岸の防災整備の推進

津波や高潮の被害から市街地を防護するため、護岸や堤防などの施設の整備を行っていますが、従来は、眺望を阻害するような高さの堤防や、消波ブロックにより海辺に近づけないなど、防護のみに視点をおいた施設の整備でした。しかし近年は、緩傾斜護岸や砂浜などによって防護効果を維持しつつ、利用者や景観に配慮した海岸整備を行っています。

【……整備事例……】

津田港海岸（香川県琴林地区・浸食対策事業）
津田港海岸は、津田の松原（国立公園第二種特別地域）で知られる白砂青松の地であり、瀬戸内海の播磨灘に面した弓状の地形を有している港湾です。海岸浸食対策として1970（昭和45）年度より海岸保全施設の改良整備を行ってきましたが浸食傾向は止まらず、前浜の消失・消波ブロック前面までの海面の接近など、早急な対応が必要とされていました。

このため1990（平成元）年度から、ふるさと海岸整備モデル事業により、既設消波ブロックを活用した離岸堤の設置・砂浜造成による消波機能の確保・既設護岸の階段化・飛沫防止のための植栽を行いました。これによって、前浜を復元して越波・飛沫防止を図り、背後住民の民生の安定を確保するとともに海岸のかつての姿を回復し、新しいまちづくり計画と調和のとれた、安全でうるおいのある海岸空間を創出したものです。

4 津波における最新の防災システム

津波が発生した場合にいち早く情報を入手し対策を行うため、国土交通省港湾局ではGPS（Global Positioning Systemグローバル ポジショニング システム：全地球測位システム）津波計の研究開発に力を入れています。従来は海底にセンサーを設置し、陸上までは海底ケーブルでつないでいましたが、海上に浮かべたブイにセンサーを取り付け、GPSでブイの移動を測定することによって、より沖合での津波の観測を行うものです。

これにより、より早く、津波の観測が可能となり、住民の早期避難が期待されます。

また、リアルタイムで全国の波の状況がわかるシステムも公開されています。ナウファス（NOWPHAS= Nationwide Ocean Wave information network for Ports and HArbourS：全国港湾海洋波浪情報網）は、独立行政法人港湾空港技術研究所の相互協力のもとに構築・運営されているわが国沿岸の波浪情報網です。

港湾空港技術研究所においては、1970年以降継続して、ナウファス波浪観測データの集中処理・解析を行っています。2005年4月現在において、全国59観測地点（波高・周期59地点、波向47地点）でリアルタイム観測を行っており、ホームページ上で簡単に、リアルタイムデータを見ることができます。

ナウファス波浪観測情報は、気象庁による波浪予報にも活用され海の安全に貢献するとともに、蓄積された長期間のデータの統計解析を通じて、港湾・海岸・空港事業の計画・調査・設計・施工をはじめとした沿岸域の開発・利用・防災に、幅広く活用されています。

3 長野県高井郡小布施町

コミュニケーションが町を豊かにする

北斎が紡いだ、うるおいのあるまちづくり

写真……石井雅義

小布施町のまちづくりの指針のひとつ「花のあるまちづくり」。住民の間に浸透し、町は花であふれている

三方を川に、残りの一方を山に囲まれた小布施（おぶせ）町は、かつてはこれといった観光資源 のない町だった。
しかし現在では、景観整備と住民参加のまちづくりにより、年間100万人以上の観光客が訪れる活気ある町へと変身を遂げている。
それは「富嶽三十六景」で名高い江戸後期の浮世絵師・葛飾北斎が、この地で作品を残したときから始まっていた。北斎の肉筆画40点余りを展示する日本唯一の美術館の建設を皮切りに、小布施町は外へ向けて目覚ましく発展していく。
それは、2人のカリスマ町長によるリーダーシップと、小布施ならではの町民の気質が導いた結果だった。

[左] 特産のクリの角材を敷き詰めた「栗の小径」。歴史ある民家と相まって趣のある風景をつくりだしている

1 高井鴻山に縁のある栗菓子店「小布施堂」 2 町並みに合わせた看板 3 小布施町地域創生部門まちづくりグループの小林賢一さん 4 ア・ラ・小布施のスタッフの関悦子さん

今日の観光資源は江戸時代に培われていた

長野市に隣接する小布施町。千曲川の肥沃な沖積土、そこに注ぐ松川の酸性土壌、水はけのよい扇状地、そして朝晩の気温の差など気候風土に恵まれ、リンゴやブドウ、モモなど、豊かな果実の産地としても知られている。なかでも有名な「小布施の栗」は、もともと江戸時代に治水のために植林されたものだが、偶然にも松川が酸性土壌であったため上質な栗が栽培できた。そのおいしさは幕府への献上品となったほど。そんな農業主体の町であった小布施町が、現在では年間100万人以上の観光客が訪れる活気ある町へと変身を遂げるきっかけとなったのが、1976年に建設された「北斎館」であった。日本で唯一、葛飾北斎の肉筆画が展示されており、所有数は肉筆画のほか版画なども含め数百点にも上るとあって、全国のマスコミに取り上げられ、小布施の名は一躍有名になった。

「それまで観光客なんていませんでした。そのころ、モスクワや北京で北斎展が開催され、世界的に北斎が注目されるようになり、貴重な作品を町民共有の財産として後世に残そうとしたことが開館のきっかけです」と、小布施町地域創生部門まちづくりグループの小林賢一さんは語る。

しかし、こんな小さな田舎町になぜ北斎の作品が大量に残っていたのか。それは江戸時代にさかのぼる。小布施に高井鴻山という人物がいた。地元の豪商の家に生まれた鴻山は、若くして京都と江戸に遊学し、そのとき多くの文化人と出会う。その後、彼らは小布施に帰った鴻山の元を訪れるようになり、そのなかの一人に北斎がいたのである。再会は鴻山37歳、北斎83歳のときのこと。以後、鴻山は北斎のパトロンとなりアトリエを提供する。北斎は度々、小布施を訪れ多くの作品を描き上げ、そのなかには北斎館の目玉となっている2台の祭屋台の天井絵「龍図」「怒涛図」も残されている。

うるおいのある美しい町は町民の手で

北斎館開館から5年後の1981年、町は「緑と水と歴史の町、暮らしに文化が息づく町、特色ある産業の町、そこに生きる喜びと誇りを感じる町」をコンセプトに第二次小布施町総合計画を策定。翌年には周辺住民から、北斎館や老舗の栗菓子店、大壁造りの民家などが立ち並び、歴史的な景観を留めている高井鴻山記念館「ゆう然楼」周辺は地域の特性を生かした町並みづくりを進めるべきとの提案があり、1984年から関係者5人が協定を結び、3年かけて「町並修景事業」を実施した。民家を移転させ広がりのあるスペースを確保したり、特産のクリの角材を敷いた「栗の小径」をつくるなど、約16000m²の空間を地域の特性を生かした町並みに再編したのである。　これがきっかけとなり1986年には、小布施町の総合計画後期基本計画に、住まい・町並みづくりのガイドライン「うるおいのある美しいまち環境デザイン協力基準」が設けられる。そしてこのことから、北斎の天井絵で有名な岩松院がある「岩松院ふるさとゾーン」、町の玄関である駅周辺の「駅前さわやかゾーン」の整備へと進展していった。

「住民と行政が互いに協力し合い、それぞれ役割分担して古いものを生かしながら新しいものをつくるこの取り組みは、一つのモデル事業として建築の分野でも注目されました」と小林さんが語るこの事業は、周辺の店舗や住宅にも及び、例えば屋根は陸屋根ではなく切妻に、看板や街灯は趣のあるデザインに付け替えるなど、住民による自発的なまちづくりの輪を広げる起爆剤にもなった。さらにこの勢いは町全体に広がり、1987年には建設省（当時）の指定を受け、「うるおいのある美しいまち環境デザイン協力基準」を具体化させた「地域住宅計画（ホープ計画）」を策定。歴史、風土を生かしたまちづくりを町全体にわたって行おうと、建物の形式、色彩、素材などについて、中心市街地、農村集落、新興住宅地の地域ごとに誘導指針を示し、小布施町をうるおいのある美しい町へとつくりあげていった。実際、小布施の町を歩いてみると、落ち着いた色合いの日本家屋と整備された歩道、花の咲き誇る軒先などが、まわりの自然と調和し気持ちを和ませてくれる。

「外は人の目が触れるので快適な空間に、内は自分たちのもの、というのが小布施に暮らす人々の意識にあります」と小林さん。このような小布施町民によるまちづくりは、自治大臣表彰（1986年）、建設大臣表彰（1988年）、都市景観大賞、農林水産大臣表彰（1994年）、内閣総理大臣表彰（1998年）など数々の賞に選ばれ、全国的にも高い評価を得ている。

今後は景観だけでなく、産業・学校・住民・行政が情報を共有することで新たなまちづくりや交流産業の育成に取り組んでいくという。実際に2005年7月には東京理科大学建築学科の「まちづくり研究所」を町役場内に開設。また、地元信州大学の人文学部や農学部とも交流の輪を広げ、福祉や教育の一層の充実のほか、小布施ならではの「6次産業」の振興にも力を注いでいくそうだ。

5 北斎館に展示されている２台の祭屋台。それぞれの天井絵を北斎が85歳と86歳のときに描いた 6 北斎館外観 7 祭屋台の天井絵「龍図」と「怒涛」はいずれも肉筆画 8 財団法人小布施町振興公社による６次産業センター 9 6次産業センターで開発・加工し販売している小布施町の特産品

積極的に町を運営するさまざまなシステム

6次産業とは、財団法人小布施町振興公社が町から委託を受けて行っている事業の一つで、「農業は、強く・優しく・面白く」をモットーにした、農産物の生産（一次産業）から加工（二次産業）および販売（三次産業）までを扱う総合産業（六次産業）のこと。一次産業×二次産業×三次産業＝六次産業の式からなった名称だ。町内にある6次産業センターでは、クリやリンゴ、ブドウなどの特産物を食料品の原料として提供する農業にとどまらず、加工、商品開発、さらには販売していくことで付加価値をつけ、雇用の場をつくりだす“創業”産業を目指している。

また、まちづくりの第3セクター「ア・ラ・小布施」も一味違った活動を行っている。資本金2600万円のうち町の出資は4%、あとは民間出資者54人からなる民間主導の町おこしの株式会社だ。しかも配当は行わず、利益は地域の活動費に充て地域を活性化させることが見返りという、その志がさらに町を発展させる仕組みとなっている。現職の市村良三町長が、商工会地域振興部部長だった1993年に中心となって立ち上げ、町おこしのためのイベントや観光事業などを行い、2001年には、国土交通省による観光カリスマ百選*に認定された取り組みだ。「a・la」とはフランス語で「～風、～流」の意味。どこかの真似ではなく小布施独自の方法で経営、文化活動を行っていこうという決意を込めてア・ラ・小布施と称し、観光情報を提供するガイドセンターや土蔵を改造したゲストハウス、喫茶・特産品の販売、小布施駅併設のコミュニティスペース、映画祭などの企画、運営と、幅広い活動を行っている。

ア・ラ・小布施で運営活動を行っているスタッフの関悦子さんはこう話す。「今年で6回目を迎える小布施国際音楽祭はすごいですよ。野外音楽堂ができたとき、町から何かやってくれないかと言われて始めた企画ですが、国内外から一流の音楽家を招き素晴らしい演奏を聴くことができます。昨年は4000人もの来場者がありました。この小さな町でこれだけの音楽祭が開かれるなんて、なかなか想像できないと思います。ア・ラ・小布施のキーワードは“交流”。外からの刺激を受けることで、地域に住む人の意識改革の場となり、小布施を訪れた人の拠点にもなる。かつて鴻山と北斎が出会ったことで重奏文化ができあがったように、これからも外との交流で変わらざるを得ないし、なおかつそれでも変わらぬ文化がまちづくりには必要だと思っています。それには行政・民間・専門家が協力し合った仕掛けづくりも大切。例えば、盆栽美術館「大観」の館長である鈴木

＊観光カリスマ百選：国土交通省による観光政策。従来型の個性のない観光地が低迷するなか、各地で観光振興にがんばる人を育てていくため、その先達となる人々を「観光カリスマ百選」として選定した。また、その人たちの類まれな努力を学ぶことによって、各観光地の魅力を高めることも目指した。2005年3月の時点で観光カリスマ選定者が100人に達したため選定は終了している。
➡ http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/kanko/top.htm

1 20種類余りのバラが咲く関谷つき子さんのオープンガーデン。バラは知人がプレゼントしてくれだんだんと増えていったそう 2 市村町長の自宅の日本庭園もオープンガーデンとして公開されている 3 4 5 関谷つき子さんと、育てているバラの一部 6 60ヵ所以上で公開されているオープンガーデンの一つ。自由に見学できる 7 8 季節の花々が咲き誇る花の情報発信基地「フローラルガーデンおぶせ」。年間に約4万2000人が訪れる。一角ではハンギングバスケットのコンテストが開催されていた

9 小布施町らしい和みの風景 10 11 盆栽作家で盆栽美術館「大観」館長の鈴木伸二さんと作品

伸二さんは世界で活躍している盆栽家で、モナコをはじめヨーロッパやアメリカなど各国の展示会に招かれ、海外でとても人気があります。でも、日本人にとって盆栽って地味なイメージがあり、それほど注目されていません。こんなにすごい人が小布施で作品をつくっているのに。もっとそのことに気づいてほしい。これからは海外からも多くの人が訪ねてくるような町にし、海外の人の視点で小布施のよさを再認識してもらえたら、また新しい広がりができると思うんです」

訪れる人を快く迎える、季節の花々が咲き誇るオープンガーデン

小布施町のもう一つの顔。それは「花のあるまちづくり」。1980年、住民の日常生活にうるおいのある環境を提供しようと、町内自治会単位で行った美化運動は、公共花壇づくりから始まり、その後120人以上の研修生を海外視察に送り出した「ヨーロッパ花と景観の研修交流事業」や、町による各地域・家庭・花壇の3部門を対象としたフラワーコンクールの開催へと発展していった。

官民一体となったこの取り組みは、町民の「ガーデニングによる美しいまちづくり」という意識をさらに高めていき、町もこれに応えるべく1992年には「フローラルガーデンおぶせ」を開園。15000m²の敷地に季節の花々が一面に咲き誇る同施設は、観光名所として、また住民への園芸指導や花苗生産施設「おぶせフラワーセンター」と連携させることで、花の情報発信基地としての役割も果たしている。そして2000年には自宅の庭などを一般に公開する「オープンガーデン」がスタート。現在、その庭は60カ所以上にもなり、新しい観光の目玉としても注目されている。

「多くの人に見てもらうことは、庭づくりの張り合いになります」と話してくれたのはオープンガーデンの参加者の一人、関谷つき子さん。5月から6月にかけては、自宅の庭に20種類余り、50本以上のバラが見事に咲き誇る。以前は団地住まいだった関谷さんは12年前に新築したのを機にガーデニングを始め、オープンガーデンには当初からメンバーとして参加している。芝張りから、敷石の施工、雨水利用のシステムまで、庭に関することはすべてをご主人と2人で行うという本格派だ。ときどきは仲の良い友人4、5人と集まって情報交換もする。

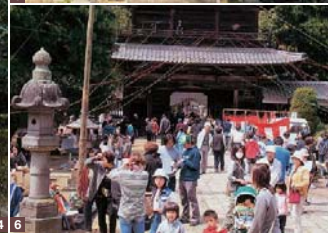
「町から補助金が出るわけではないのですが、皆、花好きが高じてやっているんです。毎日開放しておかなくては、なんて気負わず、草刈りの日はクローズするなどマイペースでできることが、長く続けられる秘訣ではないでしょうか」と関谷さん。

庭のスタイルに決まりはなく、イギリス風や日本庭園、ロックガーデン、紅葉が楽しめる庭などさまざま。オープンガーデンになっている庭には、花のキャラクターをあしらった案内板が掛かっていて、気に入った庭を予約なしで自由に見学できる。

2001年には、市村町長と時を同じくして、これらの取り組みを主導した唐沢彦三（からさわひこぞう）前町長も「人と花の輝くまちづくりカリスマ」として観光カリスマ百選に選定された。唐沢さんは長年にわたり町役場で要職を歴任した後、1989年に町長に就任。以来、町民が主役となるべく「単なる観光振興ではなく、町と住民が連携した、住民の視点に立ったまちづくり」をモットーに、その優れた主導力で、農業主体の町から年間100万人以上もの人が訪れる今日の小布施町へと導いた。この2人のカリスマによって小布施町は全国的にも優れた観光地として、訪れる多くの人々を魅了することとなったのだ。

小布施発。世界に認められた自社栽培・醸造ワイン

「世界で認められるということは日本人というアイデンティティを持ったワインでなく



1 小布施ワイナリーの若社長で栽培醸造責任者の曽我彰彦さん。後ろは自分たちで開拓したブドウ畑 2 ワイナリー内に設けられた販売所。評判がよく売り切れてしまうワインもある 3 ヨーロッパ品種のブドウ。小布施の風土に合い、素晴らしいワインができあがる 4 玄照寺住職の葦澤義文さん 5 玄照寺は天正年間に開創された歴史ある寺 6 2004年に開かれた「境内アート」の様子

てはなりません。ワインにストーリーを持たせ、日本のワイン造りのスタイルを確立することです」と語るのは小布施ワイナリーの若社長・曽我彰彦（そがあきひこ）さん。自社栽培のブドウや国産ブドウを100％使ったワインを醸造し、国際コンクールで金、銀、銅と数々の賞を受賞している実力派のワイナリーだ。

小布施ワイナリーは、もともと江戸時代末期から続く日本酒の造り酒屋だったが、第二次大戦の影響で人手と米が不足し、特産のリンゴを使った果実酒へと、転換を余儀なくされる。その後、清酒を復活させ日本酒とアップルワインの両方を醸造するようになるが、時代の流れとともにワインが一般家庭にも普及したことから、モモやブドウなど地元特産の果実を使ってフルーツワインを造るようになっていった。現在、小布施をはじめとした国産ブドウのみで造ったワインとリンゴの発泡酒・シードルを醸造している。そして栽培醸造責任者としてワイン造りを一手に引き受けている彰彦さんは四代目。当然のことのようにワイン造りを学ぶため山梨大学大学院に進んだ彰彦さんだったが、「それまで父親のワインが一番だと思っていたのに、素晴らしいワインがほかにあったんです」と、そこから本格的なワイン造りへと目覚めていく。卒業後、ワインの本場であるフランスのブルゴーニュへ渡り、ワイナリーで修行。しかし約2年半後、小布施で醸造を担っていた祖父が病気になったため急きょ帰国し、家業を継ぐこととなった。そして小布施の地でヨーロッパ品種のブドウを栽培してのワイン造りが始まった。

「ワインに適したブドウを栽培するには水はけがよく、栄養があまりないカラカラした土地のほうがいいのです。小布施は寒暖の差があり、乾燥していてブルゴーニュに似た気候だったのが幸いしました。うちは本当に小さなワイナリーですが、上質なワインを造るには小さな仕込みでないとおいしくならない。量が少ないほどおいしく品質が上がります。そして、他では当たり前のこととしてやっている輸入ワインを混ぜて造ること、これは決してしません。小布施で栽培したブドウと、それだけではどうしても足りないので長野県を中心とした国産のブドウを使って造ることにこだわっています」と彰彦さん。

最初は5haの畑を開拓することから始め、今ではカベルネ・ソービニョン、メルロー、シャルドネ、シラーなどの品種をフランスと同じ垣根仕立て栽培し、5人のスタッフでみている。特にシャルドネは小布施の気候に合うらしく、2001年のリュブリアナ国際ワインコンクールで金メダルを受賞したほど、素晴らしい出来となっている。

「自分が生まれた場所がたまたま小布施だった。そこが偶然にもブドウの産地だったのがラッキーでした。今後、小布施が世界で認められるようになるために、より多くの仲間となる人たちを誘致してもらいたいですね。前向きでまじめで体力があってという人たちを呼んで、ワインの産地になればいいと思っています。時代はオーガニックワインへと向かっています。目指しているワインはヨーロッパスタイルより繊細でナチュラルな味わい。名前でなく原材料と品質を見極めたお客さまが来てこそ本来の姿。そこから本当の "小布施ブランド" がついてくるんです。ブランドになるまでは自分の代では難しいかもしれませんが、つくった畑だけは次の世代へつなげていきたい」

まだ三十代の彰彦さん、小布施のこれからを新しいかたちで飛躍させていく一人かもしれない。

境内にアート。昔からお寺は情報発信地

小布施町の南西に位置する玄照寺は今から400年以上も昔、天正年間（1573～1591年）に開創された歴史あるお寺。二十三世にあたる住職の葦澤義文（あしざわよしふみ）さんは、この境内で2004年から「境内アート」なるイベントを催している。

「私の父親はいろいろなことに興味を持つ性格で、1960年に地域振興のためにと境内で苗市を始めたんです。これまで毎年4月に開催してきたのですが、一時期に比べると客足が減ってしまい、新たにこの境内でアートをやろうと考えつきました」と葦澤さん。第2回を迎えた2005年の境内アートでは41人の作家が全国から参加し、現代アートや絵画、版画、陶芸、写真、彫刻、染織、ガラスなど数多くの作品を並べ販売した。ほかにも沖縄出身のミュージシャンによるライブや骨董市なども開かれ、参道のみならず山門、本堂、座禅道場、裏庭と寺全体がイベント会場と化し、当日は多くの人でにぎわった。

「自分自身もワイワイするのが好きなんです。何かするのは、寺にもっと人が来て欲しいから。さまざまな人たちが来て交流することで出会いの場になればいいと思います。そこからさらなる広がりができるからね。観光客が行く場所は決まっているから、寺でイベントをして人を集め、そこから分散させる。寺が拠点となってより広範囲に行動してもらえれば、もっと小布施を楽しんでもらえるんじゃないかな」。葦澤さんは、ほかにも知的障害者の福祉施設「くりのみ園」の理事長を務めるなど、積極的に活動している。

小布施町に根ざしながらも常に外へ目を向け、新しいことをキャッチし行動していく。小布施町で暮らす人々のこうした人柄が、昔を生かした "今日のまちづくり" を支えているのかもしれない。 NE

上信越道と一般道を結ぶ ハイウェイオアシス小布施総合公園

「ハイウェイオアシス小布施総合公園」は、高速道路である上信越自動車道と一般道の両方からアクセスできるようになっている。上信越自動車道からは小布施パーキングエリアへ、一般道からは道の駅へそれぞれ車を乗り入れ、そこから直結している総合公園を散策できる。小布施町では「オアシス構想」のもと、訪れた人々の憩いの場になるようステージづくりに努めており、緑に囲まれた広い園内には美術館やレストランも点在する。また、車を置いて町内を回れるシャトルバス「おぶせ浪漫号」も運行している。

小布施町に関する詳しい情報は
小布施町役場ホームページまで。
➡ http://www.town.obuse.nagano.jp/

町長インタビュー

新しい可能性を探り さらに素晴らしい 小布施町を目指す

小布施町 市村良三町長

町全体の魅力を知ってもらうために

小布施町には魅力的な場所がたくさんあるが、訪れる人の多くが北斎館を中心に回っているので、もっと町全体に来ていただき、違ったよさを感じてもらいたい。これからは、そのためのツールをつくっていくつもりです。取り組みとしては、オープンガーデンや民泊、主体産業である農業でつくった農産物を直接買ってもらう交流産業を推進していく。時間がかかってもかまわないので、何度か来て、親戚を訪ねる感覚で、そこから信頼してもらい交流を深めていこうという方向です。そこで私がいま考えているのが、ワイナリーを軸として農村レストランをつくるということ。レストランに隣接してそこで使っている地元の農産物売場も設ける。しかもセンスのいい雰囲気にして。これまでの行政と民間の差は何かといえば、センスです。それこそお客様が求めている大切なことなのです。

時代の流れに合わせて変化していく

いいか悪いかは別として、温暖化により農産物の適地が変わり、以前と異なってワイン用ブドウがよく育つようになりました。巨峰といったブドウやリンゴが主流なわけですが、農産物の適地が変わってきているということは、ほかの作物の可能性を探す時期ではないかと思っているんです。そして次は野菜ではないかと。当然、実験が必要となってきますが、今の小布施に合った新しい野菜があるはずです。例えば「京野菜」のように「小布施ブランド」という特殊野菜を手がけていきたい。まず、6次産業センターで実験野菜のひな型づくりをし、うまくいったら農家へ推奨していく。既存のものを残しつつ、新しいことを生み出していく必要があります。

大学の研究室と共同で小布施ブランドを確立

小布施町では振興公社を活用するとともに、大学の研究所を町に設け、共同のまちづくりに参画してもらっています。現在、東京理科大学建築学科の研究所が役場の中にあります。また、長野県には信州ブランド戦略というチームがあり、私も去年から参加しているのですが、一つのモデルとして大学との共同参画を挙げたところ、これを第1号の戦略にしようということになりました。そして、さらなるブランド磨きという見地から信州大学の人文学部と農学部に絡んでいただけることになったのです。今までは「クリ」「北斎」「花」が小布施を語るキャッチフレーズでしたが、次の一手で、新たな小布施ブランドを確立していきたいと考えています。

●プロフィール●
1973年ソニー株式会社入社。1980年株式会社小布施堂入社。町並修景事業をはじめ、さまざまなまちづくり運動を展開。1994年第3セクターである株式会社アー・ラ・小布施を設立。2005年1月に小布施町長に就任。優れた感性で時代を読み取り、レベルの高いまちづくりを展開している。57歳。

シリーズ 自然浴環境 ―― 5 ――

フランス・アルザス地方のエコミュージアムによる活性化の取り組み

文・写真……藤本雅生（㈱日本設計都市計画群再開発部）

フランスで発祥し、今や世界に広がった「エコミュゼ（エコミュージアム）」。エコミュージアムは、住民を中心に行政、専門家がパートナーシップをとりながら、その地域で継承されてきた文化や慣習、自然遺産などを保存し、活用する地域社会活動の場であり、過去と現在を結ぶ新しい博物館である。日本においても、地域活性化の観点からエコミュージアムへの取り組みが行われている。

エコミュゼ（Écomusée）とは

1960年代後半、フランスで都市化が進み、農村社会が危機的状況に陥るなかで、地域の文化を再発見しようという試みから、エコミュゼの概念は生まれた。その言葉はフランスの博物館学者ジョルジュ・アンリ・リヴィエール（Georges Henri Rivière）、ユグ・ドゥ・ヴァリーヌ-ボアン（Hugues de Varine-Bohan）らによる議論のなかから出てきたものであるが、日本エコミュージアム研究会の新井重三氏は、リヴィエールがエコミュゼを「地域社会の人々の生活と、そこに自然環境、社会環境の発達過程を史的に探求し、自然遺産および文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することを通して、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする博物館」と述べていると紹介している。*1

また、横浜国立大学工学部教授で初代日本エコミュージアム研究会事務局長の大原一興氏はこれらのさまざまな概念上の特徴を、既存の博物館や地域活動の類似概念との関係において、右の図のように3つの要素がバランスよく整い、かつ一体的に密接なネットワークを組んでいることが理想的な姿であるとしている。*2

エコミュゼ・ダルザス（Écomusée d'Alsace）

2005年現在、社会博物館連盟に加盟している博物館のなかで「エコミュゼ」と名づけられているものは45館（41館がフランス国内）となっている。なかでも「エコミュゼ・ダルザス」*3は、規模が大きく、今も持続的に発展している。

❖ エコミュゼ・ダルザスのパース

ÉOMUSÉE

P40、41 の写真およびパース・図は右パンフレットより転載

設立の背景と経過

1971年、アルザス地方で取り壊しの危機にあった一軒の農家住宅を保存しようという、非営利団体「アルザス農民協会」（以下、農民協会）による活動が発端となっている。その農家住宅をその場所にあるまま保存することができなかったことから、他の場所に移すために解体し、適切な移築場所を探していた。また一方で、翌年の1972年から、ボランティアネットワークを介して、同様に取り壊しの危機にある建築物や工作物の収集を開始した。1980年、農民協会は、ミュールーズとコルマールの間に位置するカリウム鉱山跡地の一部を移築先として決定し、「エコミュゼ・ダルザス（Écomusé d' Alsace）」（以下、エコミュゼ）を設立した。そして、公共団体から無償で土地を借り、アルザス地方のさまざまな場所から移築され修復された建築物20棟とともに、1984年、正式にエコミュゼとしてオープンした。

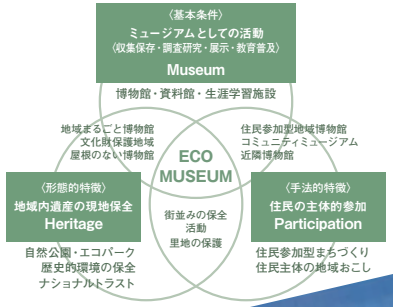
オープンに至る過程では、ボランティアの活動が非常に重要な役割を果たしたこと、それらの活動が常に行政（県、地域圏など）によって支援されてきたこと、アルザス地域の企業の協力があったことなどが、重要なポイントであった。

1991年、農民協会は、所有する不動産を新たに設立された「エコミュゼのための所有者協会」（以下、所有者協会）に譲り渡すとともに、その保存活動を支援していたが、農民協会と所有者協会を1つにまとめたほうが効率的であるという考え方から、2つの協会は「アルザスのエコミュゼ協会」（以下、協会）に統一され、現在、エコミュゼの管理、運営を一貫して行っている。

この協会は、①ボランティアグループ、②企業、社会・専門的機関、教育機関などの法人、③公共団体の3つのグループで構成されており、今なお多くの人の加入を呼びかけている。加入者は、エコミュゼで実施されるイベント情報を定期的に受け取ることができ、協会のメンバーとして保存活動に参加し、協会側は、エコミュゼそのものに愛着を覚えてもらうことが期待できる。

2004年、エコミュゼは、これまでの農村集落地区に加えて、鉱山地区を新たにオープンさせた。そこはもともと、カリウム鉱山の中心的役割を果たしていた場所であったが、2004年の創業100周年と同時に完全

❖ エコミュージアムの概念



鉱山地区の工場跡
Photo by Ecomusee d'Alsace, Sebastien Wotling

昔のままの水車小屋

ホテル（les loges de l'Ecomusée）

鍛冶職人による実演

エコミュゼのランドマークになっている展望台

周辺の村の古い農家の建物を70棟近く移築している。農家や農場、水車、家畜小屋など昔のままの姿で、生活の仕組みを見せている

鉱山地区地下坑道のガイドツアーのようす
Photo by Ecomusee d'Alsace, Jean-Marc Hedouin

昔の農作業で使っていたトラクターでエコミュゼ内を巡る

昔のお菓子作りの実演に見入る親子

深い屋根に、青い壁が印象的

に閉山することがずいぶん前から決まっていたことから、その後の活用について多くの人が関心を持っていた。

結局、産業建築物としての質の高さから保存する必要性を感じた別の非営利団体が1986年に取得したものの、1991年には農民協会と同様、所有者協会にその不動産を譲り渡すこととなり、その活用についても一任し、現在は農村集落地区と同様、協会が管理している。建物の修復とともに、リタイアした鉱夫のボランティアによって機械の修復などが行われたが、すべての建物を昔のように修復するのではなく、修復は一部にとどまり、残りについては意図的に廃墟のままとしている。

施設の概要

農村集落地区は、オープン当初20棟だった建物が徐々に増え、現在では70棟となっている。移築にあたっては、建物を無秩序に配置するのではなく、アルザス地方のどの地域のものなのかを尊重して地域ごとに7つのエリアに分けて移築している。いちばん古いものは1492年の農家住宅で、すでに500年以上が経過している。ここには、領主住宅のような裕福なものや、ぶどう農家の家、季節労働者用の住宅のほか、納屋、馬小屋、牛小屋はもちろん、油屋、共同洗濯場、見張り塔、穀物倉庫、サイロ、製粉場、蒸留工場、養蜂場、鳩小屋など、集落に必要な施設が集まっており、ほとんどがアルザスの伝統的手法であるハーフティンバー（木骨組積造り）や、藁葺き屋根を用いた魅力的な建物である。

また、できるだけ当時の生活を再現するため、畑では小麦、大麦、ライ麦などの穀類に加えて、野菜や、ワイン用のぶどうの栽培も行っているほか、各農家では、家庭菜園として野菜を作ったり、豚、山羊、鶏などの家畜を飼ったりしている。

もちろん、アルザス料理を満喫できるレストランや、エコミュゼを十分に楽しむための宿泊施設も敷地内に用意されている。ホテルは、アルザス様式の2階建ての建物10棟ほどで構成されており、家具に至るまでアルザス地方のものを使用している。

建築物ばかりでなく、手工業の保存にも力を注いでおり、失われた技術などの復活にも努めている。エコミュゼ内では、荷車を日常的に使っているため、その製作や修復をする車大工、荷車の車輪を作るための鍛冶屋、ぶどう酒づくりの樽や家庭で使うバケツ・桶などを作る樽職人などが実際にエコミュゼ内で仕事をしている。

また、新たな技術の開発も試みており、樽でビールやシュークルート（キャベツの酢づけ）、カブの酢づけなどができるまでに技術が向上している。これら職人の作業の様子は、納屋や中庭などといった決まった場所でほぼ毎日見学することができる。

直接参加できるプログラムとして、アルザスの料理教室、伝統的イベントの飾りつけ、木彫り、野菜の収穫、牛の乳しぼり、パン焼きなどのクラスが常に開催されており、子供だけでなく大人も参加が可能だ。また、教育的価値が高く評価されており、学校の課外活動としての利用も多く、1~2日または1週間のプログラムが準備されている。

アルザス地方は伝統的な多くの祭りが残されているため、エコミュゼ内でも、2月の「大騒ぎ」、3月の「復活祭」、5月の「五旬祭の馬の行列」、12月の「クリスマス」などの伝統的イベントを数多く実施しているが、例えば2005年5月には新たに「夜の光」をテーマに、初めての夜間営業のイベントが行われている。

このようにエコミュゼは、建築物という生きた記憶とノウハウを同時に保存するという目的から、今ではアルザス地方の生活に関することすべてが包含され、まさに一つの村となっている。

2004年にグランドオープンした鉱山地区では、約2時間半の2つのコースが用意されている。一つは建物の内部を巡回するコースで、エレベーターで25mのいちばん高い展望台に昇り、大きな窓を通して360度パノラマで景色を楽しむほか、展望室に展示されている、当時使われていた多くの機械を間近に見ることが可能だ。地下に降りると、当時の坑道を歩くことで、採掘の仕事がいかに暗闇のなかでの重労働であったかを垣間見ることもできる。もう一つは屋外のコースで、映像と音によるセノグラフィが、カリウム鉱山の100年の歴史を復元してくれるのを見たり、ガイドによる建築物や機械についての詳細な説明を聞きながら敷地内を散策したりするものだ。それにより、当時の鉱夫の仕事や生活を知ることができる。

鉱山地区と、以前からの農村集落地区を結ぶ鉄道も、エコミュゼ内に開通している。これは、世界初の国際鉄道線であったストラスブール（Strasbourg）とバール（Bâle）の間に建設された駅が取り壊しの危機にあったため、農家住宅と同様にエコミュゼ内に移築させたことがきっかけとなった。カリウム運搬に利用していた昔の線路と結合しており、いずれはSNCF（フランス国鉄）の駅と結びつけることを計画している。列車についても当時の車両を使うべく、1930年代のものをフランス中から探し求めた結果、交通博物館のコレクションから歴史遺産となっている車両を発見し、修復して活用している。

運営状況

最初の10年で1500万ユーロだった農村集落地区の整備費用は、そのほとんどを行政からの補助で賄っていた。しかし今回の鉱山地区の整備では、費用が2倍に膨れ上がり、民間企業とボランティアなどによる寄付（約1000万ユーロ）などが大きな財源となっている。

エコミュゼ内では210人の職員と200人のボランティアが働いており、総売上はレストラン、ホテル、店舗などを含めて750万ユーロに上る。

1984年のオープン以来、600万人の来訪者を受け入れてきたエコミュゼは、2004年に20周年を迎えた。来訪者の内訳は、アルザス地方から約40%、アルザス地方以外のフランスから約40%、残り20%はフランス国外からである。このように多くの人を引きつける理由として、昔から使用していた本物の部材で正確に移築していることや、アルザスの日常生活の再現の場、技術の継承の場となっていることなどが挙げられるが、実際には数多くのイベントを行うなど集客に力を入れた施設運営の成果によるところが大きい。

しかし、そこにエコミュージアムの概念の一つである住民の主体的参加をどのように組み入れていくかが今後の課題であろう。

日本における取り組み

日本のエコミュージアムのなかでは、山形県朝日町の取り組みが最も注目される。朝日町は山形県のほぼ中央に位置し、あたりを国立公園朝日連峰に囲まれ、町を二分するように最上川が流れている自然豊かな町である。約15年前にエコミュージアム研究会が設立され、現在まで持続的な活動を展開している。

まちづくりとエコミュージアム

朝日町では、1991年の第三次総合開発基本構想と、自然と人間の共生を原点とした「エコミュージアムの理念」に基づいて、まちづくりに取り組んでいる。2000年の第四次総合発展計画においてもこれを受け継ぎ、「自然と人間が共生し、しっかりした暮らしを築くエコミュージアムのまち」を、まちづくりの理念としている。

朝日町にとってエコミュージアムは、この町について学びながら、豊かで楽しい生活を送ること。「町は大きな博物館、町民みんなが学芸員」を合言葉に、これまで積み上げてきたその理念によるまちづくりをさらに展開することにより、町に新たな価値を与えるものと考えられている。*4

❖ 朝日町エコミュージアムの経緯

1989年10月	エコミュージアム研究会設立
1990年 9月	「地球にやさしい町」宣言
1991年 3月	第3次総合開発基本構想・基本計画策定
1991年 3月	りんご温泉本館・農業研究所オープン
1992年 6月	「国際エコミュージアムシンポジウム」開催
1995年 4月	エコミュージアム研究機構設置
1996年 3月	朝日町エコミュージアムデザイン整備計画策定
1999年 8月	エコミュージアムガイドの会設立
1999年12月	朝日町エコミュージアム協会（NPO）発足
2000年 3月	第4次朝日町総合発展計画策定
2000年 6月	エコミュージアムコアセンター「創遊館」オープン

エコミュージアムコアセンター「創遊館」

2000年6月には朝日町エコミュージアムコアセンター「創遊館」がオープンし、これまで取り組んできた運動をさらに推進するための拠点施設となっている。

朝日町は建設にあたり、ここの特性を生かした創造性あふれるエコミュージアムコアセンターの施設機能はどうあるべきかといった問いに対する案を県内外から募集。10社のプロポーザルのなかから「自然とまちの双方に向き合う新しい公共施設の在り方」を示した元倉眞琴氏の案が採用された。*5

創遊館はオープン3カ月で町の人口（約9500人）を超える1万人以上の利用者を数えている。朝日町がこの施設を核として、さらにエコミュージアムの理念を実現させていくことを期待したい。

*1.新井重三「実践エコミュージアム入門」牧野出版（1995）
*2.大原一興「エコミュージアムへの旅」鹿島出版会（1999）
*3.エコミュゼ・ダルザスホームページ
http://www.ecomusee-alsace.com
*4.朝日町ホームページ　http://www.town.asahi.yamagata.jp
*5.「環境共生建築レポートvolume14」参照

美しく機能的な環境を目指して

人々の暮らしのうえで景観は重要な要素の一つになっています。
生活を豊かなものにする、より快適な空間を求めて
TOEXは人と環境との結びつきをサポートします。

PRODUCT MESSAGE
［プロダクト メッセージ］

✣ **道の駅「観音崎」**（鹿児島県指宿市）
［シェルター］クレフヤードFXA-2型、タウンステージBS1型、DN型
［柵］楽樹L型
［手すり］サポートレール2型

天然木を使用した柵が景観と調和した、鹿児島湾を望む海岸展望台。どこまでも広がる青い空と海が、運転で疲れた体を癒します（道の駅「観音崎」）

PRODUCT MESSAGE
［プロダクト メッセージ］

マリーナに併設されたアウトレットモール。ヨットと海、雲をモチーフにした柵が海辺の雰囲気を一段と盛り上げます（広島観音マリーナ／写真下も）

海辺に沿って続く柵は、景観に配慮した特注色で仕上げました。素朴な色合いが穏やかな空間を演出します（塩浜護岸）

広島観音マリーナ（広島県広島市）
［柵］GI＋FI（鋳物パネル入り）

塩浜護岸（福岡県福岡市）
［柵］楽樹DN型（特注色）

久里浜港（神奈川県横須賀市）
［引戸］ラングベールAL型Bタイプ
［門扉］NTR特注

港湾のセキュリティ対策が強化されています（久里浜港）

PRODUCT MESSAGE
［プロダクト メッセージ］

戦艦「大和」の船首部分を模した公園スペース。スロープ柵には手すりも設け、訪れる人をやさしくウッドデッキへと誘います（大和ミュージアム内大和波止場）

海辺の公園に映える人工木柵。門司港まで延びた関門橋と相まって広がりのある空間を感じさせます（みもすそ川公園）

資料館「大和ミュージアム」。隣接する公園に潜水調査船「しんかい」や高速船艇なども展示されています（大和ミュージアム内大和波止場）

待合所から乗船口まで続くシェルター。ブルーとアイボリーの特注色でさわやかなエントランスとなっています（有川港ターミナル）

大和ミュージアム内大和波止場（広島県呉市）
［柵］PSI＋サポートレール2型
［手すり］サポートレール3型

みもすそ川公園（山口県下関市）
［柵］楽樹LJ型

有川港ターミナル（長崎県南松浦郡）
［シェルター］クレフヤードFXA-2型（特注色）

身近な川だからこそ、安全性を求めて

PRODUCT MESSAGE
［プロダクト メッセージ］

鵜飼い見物が楽しめる長良川。機能的でシンプルな手すりが石垣と川に映えます（長良川鵜飼地区護岸／写真下も）

長良川鵜飼地区護岸（岐阜県岐阜市）
［手すり］サポートレール1型（特注）

神崎川緊急船着場（大阪府大阪市）
［高欄］DK3型　［柵］POI
［門扉］NR　［手すり］サポートレール1型

神田川和泉防災船着場（東京都千代田区）
［高欄］DK3型

安全を重視した柵。シンプルなデザインが水辺の風景にとけ込んでいます（神崎川緊急船着場）

都心の防災機能として、水運を生かした船着場ができました
（神田川和泉防災船着場）

人々の暮らしに息づく和みのデザイン

✣ **三重県伊賀市立島ヶ原小・中学校**
（三重県伊賀市）
［柵］楽樹MJ型（特注）、楽樹LJ型
［手すり］サポートレール2型

✣ **函館市電停留場「昭和橋」**（北海道函館市）
［シェルター］クレフヤードFXA-1型（特注）

✣ **大湫クリーンセンター**（岐阜県端浪市）
［引戸］ジャンボスライド（特注）

曲線を描く柵や階段の手すりは人工木仕様でそろえたことで、やさしい雰囲気を醸し出しています（三重県伊賀市立島ヶ原小・中学校）

路面電車停留場の安全地帯の幅に合わせた屋根は、雪が積もりにくい特注の片流れ仕様としました（函館市電停留場「昭和橋」）

建物と田園風景に映える引き戸は、地場産の間伐材を使用しています（大湫クリーンセンター）

PRODUCT MESSAGE
［プロダクト メッセージ］

緑の広がる公園をより楽しい場に

✣ **風の道公園**（青森県八戸市）
［手すり］サポートレール2型（特注）

✣ **モエレ沼公園モエレ山**（北海道札幌市）
［手すり］サポートレール1型（特注）

柵には青森県産の杉を使用。なだらかに続く曲線のスロープや階段に沿って続く手すりが楽しい散策へと導きます（風の道公園）

ピラミッドを思わせるモエレ山。階段中央に設けられた手すりが山頂までの道のりをサポートします（モエレ沼公園モエレ山）

PROFILE
協力者紹介

横内憲久
よこうち のりひさ

1947年東京生まれ。72年日本大学大学院修士課程修了。75年7月『ウォーターフロント』（都市住宅／鹿島出版会）を出版。それ以来30年間、都市のウォーターフロント計画の研究に携わる（論文数約540編）。現在、横浜港港湾審議会、TOKYO BAYツーリズム委員会、東京港港湾審議会（海の公園）など多数の委員を務める。"ウォーターフロントからのまちづくり"がライフワーク。日本大学理工学部海洋建築工学科教授、工学博士。

中野恒明
なかの つねあき

1951年山口県生まれ。74年東京大学工学部都市工学科卒業。㈱横総合計画事務所を経て、84年アプル総合計画事務所設立、代表取締役。主な仕事として、皇居周辺道路景観整備計画および設計、門司港周辺の一連の公共空間の景観設計、新宿東口モア街歩行者空間整備、東京臨海副都心道路景観整備デザインコーディネート、宇都宮シンボルロードの設計、鹿児島みなと大通り公園などがある。

シヲバラ タク
しおばら たく

1989年多摩美術大学卒業。フォトジャーナリスト。アンビエント・デザインセンター㈱取締役を経て、現在アンビエント・デザインスタジオ代表。海外の都市計画、環境問題、アート、建築などについての写真と論説。『エスクァイア』『カーサ・ブルータス』『ランドスケープ・デザイン』誌ほかに掲載。92年APAビエンナーレ出品。2005年新風舎より写真集『BERLIN East side-West side Vanishing point』を出版。

石井雅義
いしい まさよし

1969年千葉県生まれ。92年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。環境コンサルタント勤務後、写真に転向、96年石井アトリエ開設。10年ほど前に、足尾銅山の未だ緑の戻らぬ禿山を目の当たりにし大きな衝撃を受けて以来、その風景の移り変わりを撮り続けている。主な出展歴：96年個展「足尾からの風景」銀座ニコンサロン。98年「足尾銅山緑の再生」アサヒグラフ5月号掲載。2003年写真展、足尾銅山「森のはじまるとき」新宿コニカプラザギャラリーCほか。

藤本雅生
ふじもと まさお

1970年愛媛県生まれ。大阪市立大学大学院建築学専攻修士課程修了後、都市環境研究所を経て、現在、（株）日本設計都市計画群再開発部所属。都市再開発の計画立案、事業推進を専門分野に、まちづくりコーディネート、タウンマネジメントなどにも携わる。これまでの主なプロジェクトは、水戸市赤塚駅北口地区再開発事業、飯田市橋南第一地区再開発事業など。東京電機大学非常勤講師、技術士（都市計画）、一級建築士。

八尋利恵
やひろ りえ

1962年岩手県生まれ。青山学院大学文学部卒業。東京で雑誌編集者を経験後、91年より香港に渡り、通算11年。香港在住日本人向けのフリーペーパー、旅行ガイドブックなどの編集・執筆や、雑誌・テレビなどの取材コーディネートに携わる。現在は、日系新聞社発行の雑誌編集長などを務める。

［撮影協力］西村 満（ニシムラ・スタジオ）、田中宏明（サンプロダクション）、加藤幸雄（キャッチ・ボックス）、小澤純一（東甲メゾン）
［ディレクション］高山佳代子、百瀬かほる（フォンテルノ）［アートディレクション＆デザイン］盛田尚弘

TOEX 設計者のためのビジネスサイト『ネルシスネット』
http://www.nelsis.jp
ホームページのアンケートにお答えいただくと、『Nelsis』専用バインダーがもれなく当たります。また、本誌のバックナンバーも紹介しております。設計者のために商品図面のCADデータサービスも行っておりますので、ぜひご活用ください。

本社 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-4-12
札幌営業所 〒063-0861 北海道札幌市西区八軒1条東4-1-11 泰伸ビル5F TEL.011-640-8000
東北支店 〒981-3135 宮城県仙台市泉区八乙女中央1-1-23 TEL.022-776-8562
関東支店 〒168-0073 東京都杉並区下高井戸5-4-41 TEL.03-3290-8560
長野営業所 〒381-0024 長野県長野市南長池761-5 ビルドM1F TEL.026-263-0861
静岡営業所 〒422-8035 静岡県静岡市宮竹1-13-18 TEL.054-238-3190
中京支店 〒468-0011 愛知県名古屋市天白区平針1-2105 TEL.052-807-5520
関西支店 〒560-0054 大阪府豊中市桜の町6-9-27 TEL.06-6844-9233
中国支店 〒731-3167 広島県広島市安佐南区大塚西3-3-51 TEL.082-849-5661
九州支店 〒818-0134 福岡県太宰府市大字大佐野481-3 TEL.092-925-3230
南九州営業所 〒890-0055 鹿児島県鹿児島市上荒田町35-5 みずほ福永ビル101 TEL.099-256-8955

＊本誌掲載内容および写真・図版の無断転載はかたくお断りします。

都市香港特別行政区のシンボルマーク「フライング・ドラゴン」のオフィシャルカラーである暖色系のグラデーションと同じ色調でペイントし、「香港らしさ」を強調したという

STREET FURNITURE

世界のストリートファニチャー ⑤

［中国：香港］

文／八尋利恵
写真／久米美由紀

China

HONG KONG

エジンバラプレイスのベンチ

香港ではここ数年、政府が本格的にオープンスペースの有効利用や美化に取り組み始めている。九龍半島や離島へ向かうフェリーピアの集まる香港島・セントラルの、エジンバラプレイスのベンチもその一つ。太極拳をする人、携帯電話をかける人、新聞を読む人などさまざまなポーズの色鮮やかな人型が並んだこの楽しいベンチは、コンサートや市民向けの各種講座などが催されるシティホールに面した広場に配されている。

人型は香港の人々の日常の動作を切り取ったものだが、「ここでこんなふうにくつろいでほしい」という製作者のメッセージでもある。デザインは、政府建築署（アーキテクチュアル・サービス・デパートメント）のシニアアーキテクト・馮永基（レイモンド・フォン）氏によるもの。同じようなポーズで一休みする市民や、近隣のオフィスで働くビジネスマンの憩いの場となっている。

見知らぬ同士も座れるように人型をベンチの中央に配して仕切ったのは「狭い香港」の省スペース的発想から

TOEX

都市の駐輪シーンをもっとスマートに。

新商品

パーキングポール

高さはH700とH400の2タイプを用意。

カラーは「ヒューマンカラー理論」に基づく自然界の美しい色、ナイトネイビー、ピースレッドの2色からお選びいただけます。

詳しくは設計者のためのビジネスサイト「ネルシスネット」でご覧下さい http://www.nelsis.jp

東洋エクステリア株式会社

本カタログには環境に配慮するため、下記の素材を使用しています。
●用　　紙／古紙配合率100%再生紙
●印刷インキ／揮発性有機化合物（VOC）ゼロの植物性インキ

R100 PRINTED WITH SOY INK

カタログコード 06
ER05
05100050 FON-TP